
クロード冒険譚

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クロード冒険譚

【著者名】

青蛙

【あらすじ】

レイモンドール国から出奔し、ベオーク自治国に向かう魔道師修行中の少年とその従者。その修業と日々のこぼれ話。本編のレイモンドール綺譚とその続編の間にあつた出来事です。

1 言話（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっておつます。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」 その後「イーヴアルアイ」

ラヂビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」 その後、「ラヂビアス」

この道は正しい道に続いているのか。

だが、正しい道ではなくても俺は進んで行く。

それが自分の決めた事だから。

「クロード様、あちらをじ覽下さい」

後ろから声をかけられて、振り返る少年。

斜め後ろから伸ばされた腕が少年の顔を通り過ぎて眼下を指差す。足元に見えていた海はいつの間にか広葉樹の割合が多い、緑豊かな土地に変わっていた。そのあまりにも濃い緑に少年は目を細める。

匂い立つような柔らかい青葉の絨毯。クロードは、ここがレイモンドールでは無いと思い知らされて一抹の寂しさを感じた。

「イストニア連邦国ですよ。たくさんのかな国の集まりです」

「ここで休む?」

「そうですね、クロード様もお疲れになつたでしょう」

一人は深緑の中へ、クロードにとつては初めて生國以外の場所に降り立つ。

「アウントウーン、サウンティトゥーダ。危険が無いか、辺りを探つてきなさい」

青年の言葉に、赤い大きな狼の姿ヒドリガモンのような姿の魔獣が相次いで姿を消す。

「何で海を越えただけなのにこんなに暖かいのかな」

首を傾げるクロードの横では、早速下生えの草を短剣で掃つて火

を熾す支度を始めたラヂオラスが顔を上げずに応える。

「レイモンドールに吹き降ろす海からの風も、そのレイモンドールの山脈のおかげでここに至るまでには穏やかになっているのですよ。外海のダルム海からの風を防ぐ役割をレイモンドールが担つているようです」

「ずっといよな、それ」

「下にこれを敷いてください」

なんだかなあ、と言いながらそのままの場に座らうとするクロードに見ているかのようにかかる声。

「はいはい」

差し出された薄い毛布を受け取つてクロードは、そこに寝転がつた。

見上げる空は、無常なほど青い。 クロードの心情など関係なく晴れている。

行くなと黙つて、涙を流してくれた兄の、クライブの切なげな顔。

また、会えるわね、そう言つたアリストローザの寂しげな顔。

そして、悪意に満ちた企みを抱いているらしく、コーラルの顔。

「みんな 置いてきてしまつた」

振り切つて、利己的な理由のためにレイモンドールを後にした。それを後悔しているのかとクロードは自問する。

「いや、おれは先にいく。後悔はむつと後で考える」

「何か、仰いましたか」

沸かした湯で何かを煮込んでいた匂いが漂つてくる。

「ううん、上手そうな匂いだと思つてさ」

「クロード様はこんな旅は初めてでしょうからね。少しきついかもされません。魔獣を連れての事ですから野宿することもありましょ

うし

「野宿?」

手渡された木の器を受け取りながら、なんとなくうなづいてみたりしたが。 やっぱり知らないのだから感想も無い。

「美味しい。ラドビアスって何でも上手いよな

「上手くもなりますよ。コリウス様に長年お仕えしていたんですか

ら。レイモンドールに渡るまでの道中も大変だつたんですよ」

「ぶつくさ言いながら、あつという間に食べ終えたクロードの差し
出す器を受け取つて、新たに煮物をよそつ。

「へえ、聞きたいなあ

「そうですか？」

「だめだと言われるかと思つたがラドビアスは懐かしそうに話を始めた。

地下の通路から出ると、そこはもう、ハオタイ皇国だつた。急
いで古着屋で調達した服に一人とも着替える。頭に布を被つては
いるが、一刻も早くこの地域から離れたほうがいいのは確かだ。
「カルラ様、馬を調達してまいります。ここでしばらくお待ちを」
うなづく様子も無くちらりと視線を送つただけの主人を大木の陰
に座らせてから、サンテラは街中に消えた。

何をするわけも無くただ、膝の上に置いた書物を一心に読んでいた少年。書物の上にかかる影にむつとして顔を上げる。

「何だ？」

「お、おまえ」

顔を上げた少年のあまりの人離れした美しさに若い男が固まる。
ここ、ハオタイは外国人の流入も多く、白色人種などそこら中に
いる。見慣れているはずだが。

「おまえ、女か」

つい、口に出た言葉に今まで大人しく座つていた少年の顔色が変
わる。

「いてえ！」

いきなり頬を殴りつけられて後ろに男はのけぞる。

「わたしは男だ。どこに田をつけている、このぼけー。」

じろりと見上げる少年。

その睨む顔すらまぶしいほどで男は我知らず、少年の手を掴んでいた。あらが抗う少年を無理やり立たせて逃げられないように腰に手を回す。

「おまえ、気にいった。おれのところに来い。おれは『』、ガランドの領主の息子だぜ」

この身分を出すどんな女でも思いのままのはず。まあ、こいつは男らしいが。しかし、どうにも気になつて仕方が無い。

「おれのところに来たら贅沢し放題だ。や、行くぞ」

「嫌だ。その汚い手を離せ。わたしは人を待っている。どこに行くつもりも無い」

抵抗するわけではなく、声を荒げるわけでも無いがはつきりと、それも尊大に断る少年に男は驚く。

「おまえ、さつきのおれの言つた事聞いて無かつたのか。おれは……」

「このガランドとかいう田舎街の領主のばか息子だろ？。一度も言うな。耳が穢けがれる」

「な、何だと」

それが何か？ と言いたげな顔を男に見せる少年に嗜虐しきやく的な気持ちになつて持つた腕を背中に捻り上げる。

「ふん、おまえの意向なんかどうでもいい。さあ、来い」肩に担ぎ上げると手からぞさりと大きな書物が落ちる。

「あつ」

初めて狼狽したような声を上げた少年に満足そうに男は笑つた。

「カルラ様？」

馬を引いて戻ったサンテラの田に映つたのは大木の根元に落ちているじつい本だけ。

「まったく、どこの誰ですか。殺しますよ」

恐ろしい事を涼しい顔でそう呟いたサンテラは印を組む。

『逆手、逆用、後を追え』

呼び出した使い魔にそう命を下すと、黒いぐにゃりとした影がいくつも地面の上を走つて行つた。

「おい、おまえこれに着替える」

ハオタイ風の瓦をのせた平屋の広大な屋敷の一角で男は、放るよう金糸をふんだんに使つた女物の衣装を椅子に座つている少年に投げる。

「こんな物。着るいわれがないし。どうやって着るのかも知らない」
攫さとりられて来たはずの少年は、そう言つて服を投げ返す。

「ちつ、おい、おまえ一体何様だ。いや、いい。下女に手伝わす」
手を叩くと頭を低くしてハオ族の妙齡の女たちが三人入つて来た。

「こいつにこれを着せろ」

「はい、卿秋様」

女たちが少年の服を脱がしていくのを男は楽しそうに見ている。
ところが当の本人は他人に世話をされる事に慣れてでもいるのか、恥ずかしがるそぶりも見せない。

「まあ」

下女の一人が下着姿の少年に堪らず声を上げる。

「何できれいな肌でしょう。しみ一つないわ。このお肌の色ときたら」

下女の言葉に興味を抱いて男は近くへ寄つてみる。

「確かに」

ほんの少しの落胆は、やはりこの者が少年だつたと分かったからだが。薄い薔薇色の肌に流れる亜麻色の髪。細い鎖骨のラインにじくくりと喉が鳴る。

思わず、手を触れようとした時。

「ここにいらっしゃったんですね、カルラ様。さあ、行きますよ」
窓枠に足をかけて長身の男が入つて來た。

「サンテラ、遅い」

少年が不服げに言ひ。

「遅くなつたのはあなたがあの場所にいないからです。搜しましたよ」

「こちらも負けずに戻句をいつ。

「何やつてるんです？ さあ、風邪ひきますよ。ちやつちやつと服着てください」

驚く下女をしりめにサンテラと呼ばれた青年はせつやと元の服を少年に着せ始める。

「おまえ、何やつてるんだ？」

今まであまりにも普通に入つて来て、こちらの事などそっちのけで自分たちの世界にいた二人に驚いていた男が、我に帰つて大声を出す。

「警備の兵をどうした？ いいかげんにしりよ。ここつはおれの物だ」

最後の言葉にびくりと着替えの手を止めて青年は男を見返す。

「誰が誰の物ですって？」

「そいつだ、おれが街で見つけたんだ」

「なるほど、あなたがわたしの主を連れ出しのですか。では、わたしのさつきの気持ちを実行させていただきますね」

さつきが早いが、男の首に突きつけられる短剣。怯んだといふを背中に強烈な肘うちをくらつて男は倒れこむ。

そこへ蹴りこまれる膝。そして男の右腕の関節を逆に捻りあげると、さきと氣味の悪い音が響く。

「さやあああ」

青年は、痛みと恐怖で叫ぶ男の腕を、そのまま背中に押し付けながら片膝で男を押さえ込んだ。

「次はどうしましようか。もう、片方も同じようになりたいですか

? それとも耳を削ぐほうがいいでしょうか

「血を流すのは止めておけ、服が汚れる」

泣き出した男を前に少年は肌蹴はだけた服を直すことも無く見ている。

「なんです、もう襟元を結ぶだけじゃないですか。『こ自分でやってください』

青年はため息をつくとあつさり男を離す。この場合、男より、服をちゃんと着ていらない主人の方が気になるらしかった。きちんと主人に服を着せ付けると青年は手を差し出す。

「さあ、行きましょうか」

「ああ、でもそいつはどうする？ 警備の者は？」

ああそうでしたね、と青年は言つがもう男への関心は失つたようだ。ひょいと主人を抱き上げて肩に担ぐと窓枠に手をかける。「後どのくらいいののかは存じませんが、ここから辺に居た者は皆始末しました

「どうか、じゃあ安心だな。顔を見られていたら足がつくからな」主人の言葉にええ、と笑つて青年は懐をさぐる。窓から飛び降りる直前に放つた短剣が過たず床の男の胸に刺さつた。

「どに行つてもちょっと目を離すと男女によらず、目につかれて本当に大変でしたよ。でも術を使えば足がつきますからね。なるべく使わないようには気をつけていました」

懐かしいですねと笑うラドビアスにクロードはがっくりと肩を落とす。

術を使わなかつたつて、ちょっかい出された相手を惨殺してまわつたんならさぞかし目立つたはずだ。コリウスの事になると有能なラドビアスの思考回路がおかしい方向にいつてしまつるのは初めか

らだつたらしい。

陰惨な昔話にすっかり胃酸を逆流させたクロードはげんなりと、
それからあんな事もあつた……と続けるラドビアスをながめた。

1 言話（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
不定期になりますがクロードとラドビアスの珍道中の話をのせて
こつと思つております。

2 しゃほん（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっておつます。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」 その後「イーヴアルアイ」

ラドビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」 その後、「ラドビアス」

イストニア連邦国の外れ、海に近いところまで山が張り出している山中。

その山を越えれば、割と大きな港町になつてゐる。すぐに食料などが調達できる。その利便性をかつてクロード達はこの辺にここ数日野宿しながら、結界の張り方などを勉強していた。

陽が昇り、朝露が蒸発して辺りの空気がみずみずしく潤う朝。

その中のちよつとした洞窟の中をうめるよつた大きな塊り。

一定の調子でわずかに上下しているそれ。辺りに漂うのは柔らかい眠りで織られた薄い膜のような空気。上下する塊りに触れて一緒に振れているような。

顔を湿つたものがぐるりとなぞつていぐのに驚いて目を開けたクロードは、目の前の大歯の隙間から出でいる舌を押し返す。嬉しそうな、はあはあという声の主はアウンントウエンといつ魔獸。見かけはとてもなく大きな赤い狼だ。翼があるのが普通と違うといえばそうだが。

この体温が高い魔獸のおかげでクロードはぐつすりと寝ていたのだ。丸まつて寝ているお腹あたりからもぞもぞと抜け出ると、アウントウエンも大きく伸びをして立ち上がった。

辺りを見回したクロードはすでにラドビアスが朝食の用意か何かで居ない事を知る。

「おまえはあつたかいし、ふわふわだし。おれ、ずっと野宿でもいいんだけどな」

「グワアッ」

クロードの言葉にアウントウエンが、嬉しそうに大きな頭をクロードの脇の下に突っ込んでくる。

「ギュウグワツ」

しかし、クロードの言葉に抗議の声を上げたのは横で寝ていたサウンティトウーダだつた。寝心地でいえば仕方ないこととはいへ、寝る時のお供は、黒い鱗で覆われたひんやりした体のサウンティトウーダより狼の姿のアウントウエンになる。なので、この数日サウンティトウーダはクロードに引つついて眠ることができないでいらっしゃらとしていた。

それなのにこの言葉。

収まらないサウンティトウーダが大きな棘のついた尻尾をアウントウエンに向けて、なぎ倒すように振る。それに向けて今まで勝ち誇ったような表情でクロードに撫でられていたアウントウエンが大きな口を開けて尻尾をくわえ込む。

にらみ合つ二頭の魔獣。召喚されてから、いつも一緒に結構相性が良いらしい二頭だが。こと自分の主人の愛情については譲れないとらしく、何かと小競り合いも多い。

「うわあ、止めるよ！ 何やつてんの」

すかさず間に入つたクロードに気づいて二頭の魔獣も動けない。少しでも動くと狭い洞窟の中、大好きなクロードが怪我をするのは明らかなのだ。

「もう、喧嘩するなよ。サウンティトウーダも構つてやるから。そーだ、おまえ達体を洗つてやるよ」

いい事を思いついた、と笑うクロードの言葉に二頭の魔獣はさつきの険悪な雰囲気も忘れて嬉しそうに首を振る。

体を洗うつて何だとその日は期待で輝いている。

それは美味しいのか。

それは楽しいのか。

まるで分かつて無い二頭の魔獣を連れて、クロードは荷物からあるものを取り出して早速近くの川原に降りて行つた。

「これは美味しい サウンティトウーダは不満の声を上げる。
これは楽しくない 同じく体を泡だらけにしたアウントウエン
が体を振ろうと身構える。

「だめ、だめ。まだ、ぶるぶるしちゃあだめだからな」

クロードの声に仕方無く一頭は従うが、何でこれが良い事なのか
は分からぬ。今まで体をこんなに泡だらけにして洗つたことなど無かったのだ。花のような香り。魔獸の鼻にはいささかきつ
すぎるようで気持ち悪くなる。そしてこの泡だ。ぬるぬるして
気持ち悪い上になめた物凄く不味かつたのだ。先ほどから全身
あわだらけに自分もなつてているクロードが、がしがしと掻むように
長いアウントウエンの体毛を引っかきまわしている。

それはちょっと……というか、かなり気持ちがいいのだが。

その直前にはサウンティトウーダもブラシを使ってリジリヒ
すつてもらっていた。

「はーっ、おまえ達でかいから大変だよ。でももうすぐ終わりだ」
そう言つとクロードは自分も服を脱ぐと真っ裸になつて川に向か
つて走り出す。

「よーし、川まで競争!」

言つたものの、魔獸との競争など勝つはずも無く。興奮氣味で
川の中で待つていた魔獸に軽く腕を握えられてクロードは川の中に
放りこまれる。

初夏とはいって、朝の川の水は冷たくてクロードは一瞬息が止まる。
ぎゅっと体を絞られたかのような感覚の中。

落とされたままクロードは、水中をもぐつてサウンティトウーダ
の尻尾を掴んでひっぱる。しかし、倍の勢いで引っ張り返されて
その勢いで空中へ飛ばされる。

それをアウントウエンがまたもや咥えて引き戻す。

「これか？」

「これだ。」

魔獸がお互いに顔を見合わせて笑うように咲える。それが何回も繰り返され。

その大騒ぎしているクロード達の方へ向かう人影。

「何、やつてるんです。まだ、川の水は冷たいんですよ。風邪でもひいたらどうなさるんです。それに」

冷たいラドビアスの声。それに、のところがやけに低い声だったが。

「しゃほんを魔獸に使うとはどういう見ですか。しゃほんなんて大きな町に行かないと手に入らない貴重なものなんですよ。さあ、上がつてください」

手を叩くラドビアスにクロードは、ちえつと小さく咳いて後ろの魔獸を見る。

「しゃほんがそんなに大事なものなんて知らなかつたんだ。いつも使つてるしさ」

「クロード様がお使いになるのは良いに決まつてるでしょう」ラドビアスが手に持つた大判の布でクロードを包み込むように拭く。

「わかつたよ、今度からは気をつけるよ」

クロードは殊勝にそう言いながら口笛を吹いた。
ぶるぶるぶるぶる……。

それを合図に二頭の魔獸が体を大きく震わせたため、ラドビアスは頭から水に飛び込んだようにびっしょりと濡れてしまつ。大笑いしたクロード、しかし。

「クロード様？」

語尾を上げたのはこの場合、質問では無い。やりすぎたかとクロードは上目遣いで顔を伺つ。

「なんですか？」

「い、いや。怒つてる?」

「いいえ、もう食事の用意はできております。服に着替えたらさつと食べてください。で、今日は体術の稽古をつけさせていただき

ます

「ええっ？ 今日は昨日の続きじゃあ」
頭を必要以上にがしがしと拭かれながらクロードはしまったと思うが。

大判の布を体に巻きつけて歩き出したクロードにすつきりした顔の魔獸がぴったりとつく。 クロードの感情の揺れに一頭はすぐ敏感なのだ。

いつもは、ラドビアスの言うことにも従っているがそれはラドビアスがクロードの従者兼、保護者だと分かつてているためだ。

もし、ラドビアスがクロードに危害を加えるような事があつたら、たちまち一頭はラドビアスを食い殺しているだろ。 召喚した主人に無条件に懐ぐのか、クロードだからなのか。 それはわからないうが。

「ずっと野宿とこつわけはいかないですし、もう少し一頭を離すことも考えないと」

そう言つたラドビアスに向けてすかさず、一頭が威嚇のうなりを上げる。

「なんで？」

「この先、街にずっと出ないわけにもいかないでしょう。別の場所で寝るように躊躇してくださいよ、クロード様」

負けずに一頭にきつい視線を送つてラドビアスはクロードを見る。「クロード様、お食事が終わったら町へ行ってみましょう」
体術の練習は？ 聞こつとしたがラドビアスはさつぞと火が気になるからと背中を向けて足早に斜面を駆け上がつて行つた。

「町か」

久しぶりに他の人間と会うのもいいかもしない。

でも、とクロードは思う。 ここに留まるより早くおれはベー
オークに行きたい。 体がもつなら、不眠不休でもいいくらいな
に。

一向にこじを出ようとしないラドビアスに不満もたまる。

「今日はおれもきつちり話をつけなきや」

クロードは少し湿つた一頭の魔獸の頭をかきながらラドビアスの背中に向けて呟く。

食事の後、クロードに山から出ないよつとせいかつ言い聞かされた魔獸は不服そうに鼻をならす。しかし、山道から街道に出る手前で再度ラドビアスにきつく言われて仕方なく来た道の上を飛び去つていく。

街道を下つて行くとだんだん人の往来も賑やかになつていぐ。レイモンドールと似ているがやはり、そこはお国柄が出るのだろう。人種は同じでも着ている物や髪型など少しづつ違つていて見ていて飽きない。

「ねえ、皆襟が高い服が多いね」

「ああ、あれですか。なんでも貴族なんかは襟の飾りだけで顔の三倍はあるらしいですよ。レースや細密な刺繡で飾れば飾るほど良い物らしいです」

へええと感心しながら左右を見回しているクロードはまだ見てもただの観光客。おのぼりさん状態だ。

「あちらで一休みしましょう」

ラドビアスが噴水のある広場にある休憩用の椅子を指差す。

「ラドビアス、おれさあ」

座ると同時に話しあしたクロードをラドビアスはダメですと一言で黙らせる。

「このままオークには参りませんよ、クロード様」

「なんでだよ、早くしないとおれじじいになつちゃう

分かつてますと簡単にいなされて撫然とするクロードにラドビアスは肩に手を置く。

「今までではクロード様は必ず、死にます。経典を出す、出さない、そんな交渉など受け付けてくれないほど弱い。この西側の大陸一帯に留まり、魔術と剣術、体術の勉強を腰をすえてなさらないと必ず死ぬって。そんなのわからないし、おまえだつているじゃな

「いか。魔獸だつていいるし」

「わたしだつて相手になんかなりませんよ。あつちにはわたしみたいな僕が『じるじる』しているんですよ。ビカラ様がお元気になられていたなら、わたしや魔獸など何人いたつてダメでしょうね」

「ラビニアスはもう言い切つてクロードを見つめた。

「そんなに強いの？」

「ええ、とうなずくラビニアスにそんなにまつきつ言つなみとクロードは天を仰いだ。

眩しい光が矢のようにクロードの目を刺してたちまち目の前が真っ白になる。

「そう、長じことではあります。ベオークには直行しませんが少しづつ東へは行きますし。クロード様、どうしてここへ来たか分かりますか」

頭に手を置かれて、クロードはゆっくりと横の方へ顔を向かた。
「だつて、ちようじ降りるのに都合が良かつたから。じゃないの？」
「ここ」の廟には勉強になるものがあるんですよ」

偶然かと思つていたのに、ここに初めから来る予定だつたとは。 外国のこんな何てことのない港町の廟に何があるのか。 そして、五百年以上も国から出てないのにそんな事を知つている、あるいは覚えているこの男に改めてクロードは驚く。

「そういう事なら。今から行くの？」

「ええ」

「アエントウハウントサウンティトウーダにお土産買つてあげたいんだけど」

「いいですよ、何を買われるおつもりですか？」

「山羊か羊の頭と臓物。それと馬の舌を何個か。大牛の玉玉を二つづつ、あとはねえ……」

「そんなもん持つて街をうろついて思つてたんですか。だめに決まつてるでしょ」

ええーっと不貞腐れたクロードにラドビアスが冷たく言つ。

「だいたい、大牛の目玉なんてそこらで売つてるわけないでしょ？」

「そうなの？ 飴みたいに美味しいぞうに舐めてるんだけど」

「それは大牛じゃないと 思いますよ」

クロードがそれじゃあ何だと聞いたげな顔を向けると、ラドビアスはにまりと笑つた。

「何だと思います？」

もの凄い悪い顔にクロードはぞきつと目玉を舐めている魔獸を頭に思い描く。

丸くて、ちょうど人間の 。

聞きたいが聞けない。

笑つて いる顔が やけに怖かつたのだ。

何を舐めていたのかより、ラドビアスの方が 。

3 口述（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」 その後「イーヴアルアイ」

ラドビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」 その後、「ラドビアス」

灰色の陰鬱な外観。

賑やかな噴水のある広場近く、一つ一つ通りを外れただけでこんなにも静かなのか。

誰もいない通りの前でクロードは廟に入るのを躊躇う。

そこだけ、町の中心から取り残されているような。

ひつそりと膝をかかえてくるような口陰たまひの一角。

「ここに入るの？」

隣で歩いている背の高い男に尋ねると男は不思議そうに少年を見下ろす。

「そうですよ、どうしたんです？」

クロードは上手く説明できずに頭を横に振る。

廟は、誰にでも開かれている。

しかし、その真の姿まで広く開かれているわけでは無い。ほんの入り口。口当たりの良いところだけは確かに見せてはいる。

それは、レイモンドールの廟でもここでも同じなのか。

門を潜つて敷地に入ると微かに魔術の痕跡が感じられる。押し返すほどの障壁では無いが、顔や体に当たるのは侵入者を知らせるための結界が張つてあるのだ。

クロードにもそんなことくらいには感じられるようになつてきいていた。

建物の大扉は開かれていて、お馴染みの薄暗さが中をいつそう謎

めいた空間に見せて いる。

クロードのためらいなど関係なく、見知つた所のよつてラドビニアスは廟の中に入つて行つた。

レイモンドール國の廟と違つて いるのは、その廟の中に描いてある文字にレーン文字が無いこと。こゝら辺の大陸の西側は、古代レーン文字を源流とするアーリア語が主流になつている。各國、地域によつて少しづつ訛りや、音の読み方に違いがあるが。

それでも、ここにレーン文字は一つも無い。それは魔道教が大陸の東、ベオーク自治国 の影響下にあるためだ。

レイモンドール國の魔道教は、レーン文字を魔道師の祖であるイーヴァルアイが組み込んだために範字とレーン文字の一いつの術が混じつて いる。つまりこの世界では特異な物なのだ。

だがクロードにしてみれば、初めて教わつたのがレイモンドールの術だつたわけで、範字ばかりの術はかえつて不思議な感じがする。「ここには、何があるのさ」

「入ればわかりますよ」

さあ、と自分の家のよつて奥に進むラドビニアスの後をしぶしぶクロードも続く。

「どこへ行くのですか。この奥へは一般の方は遠慮してもらつております」

若い魔道師がやんわりと、だがきつぱり一人の行く手を阻む。「だつてさ、どうするの」

クロードの声にラドビニアスは待つてください、と軽くいりそその若い魔道師に自身をくらわせて脇によける。

「さあ、行きましょう」

あつさり、不法侵入をする自分の従者にため息をつきながらクロードは奥に向かう。

奥に見えた祭壇の前に立つとラドビニアスは複雑な印を素早く組んで呪文を唱える。

『解呪、解印、解封、在りし物ここに現せ』

呪文が終わると同時に、祭壇の飾りの一部が「トコトコ」音と共に落ちて砕ける。

「壊しちゃったの？」

クロードが誰かが今の音に気づいてやつてくれるんぢやないかと見回している横で、ラドビアスはすまじて壊した所から中に手を突っ込む。

「早く、誰か来ちゃうよ。何が入ってんの？」

おろおろと見るクロードの前に突き出される本。

「え？ 何これ？」

「本ですよ」

「そんなの、見ればわかるよ。何の本なのさ。わざわざ取りにくるつて」

ふうと埃を吹き飛ばすと軽く本の表面を一撫でしたラドビアスが、立ち上がる。

「大陸の西側一帯の言語の本ですね。昔、ヨリウス様が勉強なさつて邪魔になつてここに置いて行つた物です」

「は？」

それがどうしたと言わんばかりでクロードはラドビアスの顔を見たが、ラドビアスは嬉しそうに本を捲る。

「ほら、ここに書き込みとかありますよ。お綺麗な字ですねえ、あ、ここには落書きが」

「ちょっとラドビアス、大事な物つてもしかしてこれじゃあ無いよね。おれの勉強になる物つて言つてたよね。これが何の勉強になるのさ」

クロードの抗議にも手を休めないラドビアスに焦れてクロードが体を揺らすとやつと彼がこちらに向く。

「何ですか？ クロード様」

「何ですか、じゃないだろ？ おれのためとか言つて自分が欲しかつただけじゃないか」

ラドビアスは本をぱたんと閉じるとクロードに再度本を差し出す。

「これでクロード様もお勉強なさるんですよ、言葉を」

「何で？」

少しの間の後。ラドビアスは必要だからです、と宣言したがそれは詭弁にすぎないのは明らかだつた。

「一日潰してこれ取りに来たんだから、じつちの要求を聞いてもらえるかな」

「要求ですか」

「そう、牛の頭買いに行くから」

クロードに仕方ありませんね、とわがままに付き合つた風に言ったラドビアスは、自分でもこれはクロードに関係ないとは思つてゐみたいだつた。

ラドビアスは不信な音に集まつて来た魔道師たちを、全員術で縛ると用は済んだとばかりに出て行く。

「ラドビアス、解除しなくていいのかよ、術」

後ろから追いついたクロードに彼は前を向いたまま応える。

「あそここの廟主が帰つたら解くんじゃないですか。あの場にいなさそうでしたから」

ラドビアスが、いつも穏やかで誰にでも優しいなどとは最早クロードも思つてない。この男が結構自分のこだわり以外には冷淡なことは分かつてきっていたから。

賑やかな通りに戻つてクロードは肉屋を捲して走り出す。肉の塊りが描いてある看板を見つけて入つてみる。店主らしい親父の背後には何の肉なのか、肉の塊りがずらりと太い金属の針につるされている。

「いらっしゃい、ぼうずお使いかい？ 何を頼まれたんだい」

クロードにはよく聞き取れない訛りのため、一度聞き直してクロードは意味を理解する。つまりお使いを頼まれたがき扱いなんだな。

「じゃあ、牛の頭を一つほど。できれば大牛がいいんだけど」

「ええ？」

クロードの喋る言葉も分かりにくかったんだろうが、大牛の頭を母親に頼まれて買いに来る少年もあまりいないだろ。普通の牛の一倍はある大牛の頭を二つも何にするつもりか？ 店主は聞き間違いかと首を捻る。そこへ。

「普通のでいい。牛の頭だ、それを一つ。それから干し肉を一包み、骨付きのハムを二つほど包んでくれ」

少年の肩の辺から顔を出した上背のある、少年の保護者らしい男がはつきりと声をかけてきた。

「言葉が通じなかつたでしょう？ だから勉強は必要なんですよ、クロード様」

「ちえつ、それを言いたかつたんだな。ラジビアス」

外国人風の身なりだが背の高い男の言葉は流暢で、服さえ同じならこここの土地の者とは区別などできないだろ。

「はい、お待たせ。こんな大きな牛の頭を何にするんです？」

「食べるんだよ、勿論」

少年の返事に店主は驚いて一人を見た。今、食べると言つたか？ 目を丸くした店主を置いてクロードとラジビアスは歩きだした。

「あのおやじ、おれたちが食べるかと思つたかな」

「わざと言わなかつたでしよう、クロード様」

うん、と笑うクロードにやれやれとラジビアスは言つが顔には笑みを浮かべていた。

クロードが山道にさしかかるとがさがさと低木を搔き分ける音が盛大に聞こえて。

「アウントウエン、サウンティトウーダ」

声をかけると、飛び出してきた大型の獣。

もし山中で知らない人がこの二頭に会つてしまつたらもう、自分の命は無いと覚悟しただろ。暗赤色の見上げる大きさの狼。黒っぽい物語に出てきそうな鱗を持った獣。

その二頭が大きな口を一杯開けてこちらを見ている。

「なんだあ、もうわかつちやつたの？ そうだよ、お利巧にしてた

からお土産があるんだ」

クロードの言葉に喜びの雄たけびを上げて、一頭の魔獸がクロードを押し倒す。

知らない人が見たら絶対、少年が恐ろしい動物に襲われているとしか見えない図だ。

「わははは、止めろよ。くすぐりたい」

何とか一頭の魔獸のじやれつきから逃げ出してクロードはほこりと笑った。

「で、どうがおれを乗せて帰つてくれるの？」

「あんなことを言つのはじやなかつた。クロードは後々まで後悔する。

あのクロードの言葉の後、恐ろしい争いが始まつてしまひ。辺り一面、アウントウエンが吐いた炎で焼き尽くされ、残つた木々はサウンティトウーダの強靭な尾によりなぎ倒された。

にらみ合ひ、一頭の魔獸が距離を取つて離れたところで、すかさずクロードが間に飛び込む。

「おまえたち、今すぐこやめないとお土産はおれとハドビアスで食べちゃうからな」

その声に、一頭はピタリと動きを止めてクロードに注目する。

「もう、歩いて帰るよ。嘘偽ばかりするんだから、今日はおまえたち外で寝る」

クロードの言葉に、一頭の魔獸は頭をうな垂れる。その様子に可哀相になつて許してやる、口を開けいつとしたが。

「だめですよ、彼らを甘やかしたり。今日は晩御飯抜きですからね」

「ひ、ひん」

恨めしそうに見る魔獸を見ないよひこ、前だけを見ながらクロードは朝いた洞窟に戻る。

日が暮れて少し寒くなつたが今日さぬくいアウントウエンもいない。仕方無く毛布を体に巻きつけていふと、畳に持つて帰つてきた本が置いてある。

僅かな明かりを頼りになんの気なしにパラパラと捲つていると、本後半の余白にいろいろ範字で書き込みがある。

それは、勉強の疑問や、覚えておきたいことだつたり。そして、その日の日記らしに書き込みも あつた。

(月×日。今日は、サンテラがついからどこにも行けなかつた。市が立つていて珍しい宝石とかあるかもしけなかつたのに。面白くないからふて寝する)

「へええ、コリウスつたらこんな事書いていたんだあ。サンテラつてレイモンドールに来る前のラドビアスの名前だよな」

クロードは笑みを浮かべて次のページを開く。

(月×日。今日は、サンテラが洗濯してる隙に出かけたら、旅回りの劇団と一緒にこないかと誘われる。面白やうだからついて行つたが、女の格好をさせられそうになつたので術をかけて逃れる。そこでサンテラに見つかってまた、怒られた。最悪。あいつはわたしの母親かつ。口うるさ過ぎ。本当は、中年のおばさんなんじゃないのか。)

「あははっ。そういうや、コリウスむこの頃つておれと同じ年くらいか。偉そだつたけど結構思つてることや、やることはおれと変わらないじやんか」

面白くなつてきて、次々と捲つてみるとラドビアスが洞窟に入つて來た。

「おや、クロード様。お勉強をされているんですか」

「うん、まあ。ねえ、ラドビアスはこれをもう見たの?」

「いいえ、最初の辺くらいですが」

やつぱりねえとうなづくクロードまでやこしたしながりラドビアスを見あげる。

「一体どうしました? 気味悪いですよ」

クローデにもう一枚毛布をかけながらラジビアスは眉を上げた。

「見てみる？」

「いいですけど。語学の本ならクローデ様にこそ読んでいただきたいものですが、」

いつもの勉強では見せないような楽しそうな顔のクローデに不信感を見せながらも、受け取った本をラジビアスは開く。

しばしの沈黙の後。

そのまま置かれる本。

「どう、だつた？」

それには応えず、代わりにラジビアスが厳しくクローデに告げる。

「もうお休みください。明日は早いですよ」

「あ、はい」

ちらりと見た本の余白にある走り書きは。

(サンテラ。あいつ、むかつく)

一言だけだつた。

4 幼い記憶（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっておつます。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴアルアイ」

ラドビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

明るい日差しが、細かい粒子になつてシャワーのように降り注ぐ午後の街中。

宿の窓を通して小むこ「じどもの笑い声が響く。

楽しげな声に誘われるよつて窓辺に向かう少年。

何人かのこどもたちが手に何かを持ちながら鬼ごっこのように追いかけ、追いかけられながら笑つ。

「じどもの笑顔に自分の失つてしまつた時間に思いをはせて少年の顔に影がさす。

おれは見た目はいつまでもがきなのに。それにしても。

「 小さかった頃？ なんか覚えてないんだよな」

クロードは窓の外に田をやる。覚えているのはモンゴメリー州にいた頃からだけだ。もっと小さかった頃はゴートの廟にいたはずなのに。

その頃のことは何もクロードは覚えてなかつた。

ふいに「えーん」という大きな声とやわらかいものを叩いた湿り気のある音が響く。

さらに、大人の叱りつける声がして、先ほどとは打つて変わった子供の泣き声。

「あんなにおこらなくてもいいじゃんか」

クロードは出窓に腰をかけてぶつぶつと言つ。

「でも、何かわけがあるんですよ。一部分だけじゃなんとも言えませんよ」

自分の意見に同意してくれるかと思ったクロードは、後ろを振り返る。やんわりと笑いながらこちらを見るラドビアスは備え付けの椅子に腰掛ける。

「小さいこどもは手がかかりますから」

「小さな子供の面倒なんか見たことがあるの？ ゴートの廟にいたルークなら分かるけどさ」

クロードの言葉にそうですねえ、とラドビアスは話を始めた。

レイモンドールの魔道教の総本山、ゴート山脈にあるレイモンドールの標高を持つ靈山ハングル山。

その廟主であるルーク。彼は急いで忘れ物を取り上げると竜門を開ける。

次にルークがモンド州の州城の一角に竜門を開けて出た途端、厳しい声が飛ぶ。

「遅い」

目の前には椅子にふんぞり返っている七歳ほどの子ども。

「申し訳ありません。ちょっと忘れ物を取りにゴートの廟に戻つてました」

「どうでもいいが、がきを置いていくな。せつきから泣いてうるさくてならん」

亞麻色の髪を肩下に流した驚くほど整った顔の少年が、面白くなさそうに指差した先にいる四歳くらいの子ども。

泣きつかれたのか床に座り込んでいた。が、ルークの顔を見つけるとぱっと顔が明るくなつて走りよつて来る。

「ルーク、どこに行つてたの？ 寂しかつたのに」

「おやおや、こんなにたくさん人がいるじゃないですか、離ちゃん」

ルークは慣れた仕草でひょいと少年を抱き上げると、その体に毛

布を巻きつけてやる。

「ほら、これを取りに行ってたんですよ。これが無いと寝られないでしょ、う？」

「わあー！ ありがと、ルーク」

しがみつく少年の姿に大きく舌打ちをする亞麻色の髪の少年。

「おい、ルーク。いい加減にそいつを降ろせ。そして、クロード。おまえは今日からここで暮らすんだから何時までも泣いてるヒツバタくからな」

「ええーっ？ 嫌だ。『ゴートの廟でルークと一緒に』

「だめだ。わたしと一緒にここで暮らすんだ」

「うわーん！」

大声で泣き出した少年にまわりの大人がおろおろと見下ろす。

「なんとかしる、ラドビアス」

「と、言いましてもわたしは小さい子供なんて相手にしたことありますんよ」

「じゃあガリオール、おまえ子だくさんの家出身だろー」

「いえ、わたしは末っ子でして」

「だんづ、と両足で床を蹴るように椅子から飛び降りた少年。足音荒ぐルーキの手を握り締めるクロードと呼ばれた少年の手を掴んで自分の方へ引き寄せた。

「今日からわたしがおまえの兄だ。甘えていいからな」

「いやだあ！ ルークがいい！」

クロードの言葉の後に殴りかかるとする少年をラドビアスと呼ばれた長身の男が抱きとめる。

「イーヴァルアイ様、いけません」

「くそつ！ ルーク、おまえの育て方が悪い」

「そんなあ、イーヴァルアイ様こそ、今は子どもに擬態なさつているのにそんな態度はないでしょ？ 七歳だなんて誰も思いませんよ。だから離ちゃんが怖がるんです」

「ふん」

鼻を鳴らしたイーヴァルアイと呼ばれた少年がルークを睨むように見上げる。

「たつた今からクロードを離ちゃんととか言つのを禁じる。」
わたしの弟としてここで普通の暮らしを送らせるんだからな

「はあ、承知しました」

うなずくルークは、しゃがみ込んでクロードをぎゅっと抱きしめてから離す。

「ようございましたね、クロード様。次王にお仕えになるまでここで幸せにお暮らしあさー」

「ルーク？」

懇懃に挨拶をするルークに幼いクロードも別れを感じて手を伸ばしたが、ルークは笑顔のまま竜門をぐぐり、ガリオールもサイトスへ帰つて行つた。

「あの……」

「イーヴァルアイと呼ばれた少年におずおずと声をかけてくる、クロード。

「何だ？」

もじもじとする小さい少年はなかなかその先を言わない。

「だから何だと言つている！」

「イーヴァルアイ様、そんなふつに仰つては怖がつて何も言えませんよ」

ラドビアスがはらはらと横から声を出す。

今まで王の半身は次の王が即位するまでゴートの廟で育てられていたのだ。だが、今度のゴーラル王の子どもを主が見たときから扱いが違つていた。

それはこの国の魔道師の祖であるイーヴァルアイが、半身をモンド州のハーロート公爵の子どもとして預けるように決めた事。

あまつさえ自分まで公の子どもになると云いだしたのにラドビアスは驚いたが。

「怒らないから、早く言え！」

その言い方がすでに怒っているのだが言つてゐる本人は気付いていない。

「えつと……、おしつこ」

「何?」

「ああ、お手洗いに行きたいのですね。さあ、行きましょう」

「何だ、おしめでも当てているのかと思つていた」

「いくらなんでもクロード様は四歳なんですから、おしめは廻してないですよ」

「そうなのか?」

少年の手を引きながらラドビアスはため息をつく。この少年の記憶を消したほうがいいのかもしれない。ルークに思いを残すぎていては良くない。

わたしに、こんな小さな子どもの面倒が見れるのか。いや、それよりも七歳に擬態した主の面倒を見ることが出来るだらうか、と。

「結局クロード様は主城の方でお育ちになりましたから、わたしがお相手することもありませんでしたが」

話を聞いてなるほどとクロードは自分の記憶が無いことに得心がいく。王の半身は魔道師としてルークに大きくなるまで養育されるはずなのに自分にはその記憶が無かった。

それは、別れたのが小さかつたからもあるが、ラドビアスによつて記憶を消されていたと言つことなのか。

半年くらいしか付き合ひが無かつたと思つていたルークに四歳まで育てられていたのか。

彼に親しみを感じていたのは、そのせいなのかと記憶の中のルークを懐かしく思い出し笑みを浮かべた。

「ねえ、コリウスって小さこじもの頃はどんなんだったの？」

「本当にお小さい頃。ベオーク自治圏でお暮らしお頃はそれは愛らしいお子様でしたよ」

「へええ、あいつが愛らしこそで言われても素直につなづけないよなあ」

「そうですか？　あの後もずっとコリウス様はお可愛いかったと思いますが」

ええつ？　とラドビアスの顔をじりくくり見るが、その顔は本当にそう思つてゐる確信の顔だ。ラドビアスにとってコリウスがドランゴンに変わつたとしたつて、（お可愛い）としか思わないだらう。

クロードは大きくため息をついて窓に視線を移す。

ラドビアスがいかにコリウスが可愛いかったのかを話す声が昼間の穏やかな空氣に溶けていく。

そして。

「おい、いいかげんにしろよ、ラドビアス」
半刻たつたところでクロードが立ち上がつた。

5 祭りの夜（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっております。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」 その後「イーヴアルアイ」

ラドビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」 その後、「ラドビアス」

5 祭りの夜

夏の気配が近いこの頃。朝夕はまだまだ肌寒いが昼間はむうとあるほど。

その森に張つた結界の中で繰り返す術。

クローデの放つた炎が結界の中のブナの木を一瞬に燃やしつぶす。「今日はこのくらいでお終いにしましよう」「うう」とさつと指の動き一つで大きな炎を消すとラドビアスは結界を解いた。

「お疲れでしょう？　朝から休まないで練習されていたんですから」「うん」

緊張感から解き離れてクローデは、ほっと息をついて辺りを見回した。暖かい空気はそのままに、それでも太陽は暮れしていくとあつという間にその姿を消す。

足元を取られないように気をつけながら歩いていくと、村に向かう手前の灌木もまばらな中に何人もの若者が一人連れで入っていく。

「何？　何なの、ラドビアス？」

ああ、そう言つてラドビアスは決まり悪げにクロードを見下ろす。

「だから、何なのさ」

重ねて聞くクロードにラドビアスは、ため息をつきながらわざかに歩みを速める。

「今日は、この辺の村の祭りです」

「で？」

「クローデさま、ここら辺で祭りの晩つていうのは、男女が思いを遂げる機会でもあります」

早口でまくしたてるラドビアスにクロードはへえーとのんきな声をあげて。

「それってどういいう?」

クロードの質問にラドビアスはぎくりと立ち止まる。

「クロードさま、あんまりじどもつぽい事を仰るとわたしも怒りますよ。暗がりで若い男女がやることなんて決まっているでしょう」

大声を出すラドビアスに、今度はクロードがうろたえて宥める。

「うわあ、ごめん。そうだよなあ。わかつたから、声小さくして。お願ひ」

早くこの危険地帯を抜けなくてはとクロードはぐくつぱを飲み込んだ。

その灌木の林の反対側の使われてない獵師子小屋に落ち着いたクロードは、ラドビアスが熾した火の前でうつらうつらしながら窓いでいた。

「クロードさま、お休みになつたら毛布のところまでお連れしますから横になつてください」

「うん、そうする」

暖かい火の前で横になつた少年を見るラドビアスは、ふとこんな事が前にあつたのを思い出していた。

それは、もう五百年前の事。

ベオーク自治国から逃げた二人は、目立たないよう旅を続けていたため、野宿も多い。

ここにのところ野宿が続いて主人の疲労は頂点のようだつた。そこに見つけた作業小屋。
心からほつとして中をのぞく。

「カルラさま、お休みになられるのでしたらあちらに敷布を敷いておりますよ」

じくり、じくりと頭が揺れる主人にサンテラは声をかける。

山中でやつと見つけた無人の小屋をざつと斤付けて火を熾すと、さつそくカルラは船を漕ぎ出したのだった。

「カルラさま」

「うーん、寝たら連れていって、サンテラ」

カルラはむにゅむにゅと口の中をそう言つと構わず横になる。それをだめですと言いながらため息をついてながめていたサンテラだったが。火の粉が主人に飛んではと、膝をついて庇うようにカルラを抱き上げた。

「こんな硬い床でお休みになられたら、明日体が痛みますよ」
そこでサンテラの動きが止まる。カルラの長い亞麻色の髪が抱き上げた事によって覆っていた額から滑り落ち、肩に流れた。
さらさらとすべるように流れる髪。

この髪は昨日自分が丁寧に洗ったものだ。カルラは、必要なく体に触れられることを極端に嫌う。

だから、サンテラは何かと理由をつけてカルラの世話をする。手をかけ、言葉をかける。

髪をこうやつて梳くのもお世話しているのだからと自分に言い訳をしながら、髪に手を差し入れる。

そして残された数本の髪を払おうと顔に指を近づけて……。
わずかに開いた唇が目に入ってしまう。暗闇の中、炎に照らされて上気した頬。長い睫。

誘うような唇。

はつと慌ててサンテラは顔を背ける。

今、わたしは何を考えていた？　この方はわたしの主人だ。
そう言い聞かせて、顔を戻す。しかし、自分は正式にはまだカルラの兄のバサラの僕なのだ。背中にある龍印はバサラの物だ。なぜ、主人を裏切つてカルラについて来たのだろう。龍印を受けた僕は普通主人以外に興味を持つことは無い、そう聞いていたのに。

自分はどうして違うのか。ほんの幼いカルラを見たときから。心はカルラの物だった。

あの時、必死で逃げるカルラを見過ごせなかつた。

一番上の兄を殺したと思い込んで逃げる血まみれのカルラを助けてないと。

いや、こまま離れるわけにはいかないと。
これは、まさか恋愛なのか。わたしはカルラを、愛しているのか。

二人で逃げる先に何があるのか。

しかし、サンテラには悲壮なカルラとは別の甘い感情をいだくの
を抑えられなかつた。
わたしだけを頼つて。
わたしだけを見て。

例えそれがしもべという立場だったとしても。

この世の中で二人きりという究極の立場に今は

いたい。

それで十分だと思っていたのに。人というものの欲望の際限ない事にサンテラは苦く笑う。一つが満たされたらその次、そしてまたその先へ。

自分のこの思いを伝えたい。そしてその次は……。

考え方をしているサンテラに抱かれて眠るカルラは、寝ぼけているのか、その手をサンテラの襟元にのばしてぐいっと引っ張る。あと少しで触れようとするその距離にサンテラは、抗えずに固まる。

「カルラさま」

掠れるような声は、本当に主人を起こそうとする声なのか。

この先を自分は見たいのか。それとも避けたいのか。

口付けの後は。自分の欲はどんどん先に行けと叱咤するだろう。
だが、主人は、カルラがそれを望むことはあり得ない。だが、一回きりなら。蔑まれても嫌われても思いが適うなら本望なのではないか。

バサラの事を悪し様に言えない自分。それは自分も同じだから

だ。

同じよつに無理やり、思いを遂げてしまつ。それでいいのか。自分を愛すこととは、本当に無いと言えるのか。一方通行ではない関係を。築けると思つのは欲張りな事なのだろうか。

サンテラは顔を落とすと触れるだけの口付けをして。

「カルラさま、敷布の処までお連れします」

そつと抱き上げて出来るだけゆっくりと歩く。包むよつに抱いているカルラの体を刻むこむよつにゆつくつ。

「サンテラおやすみ」

「お休みなさいませ」

体を下ろされたことで眠りの縁から寸の間戻つたカルラに、そつと言つとサンテラは断ち切るよつにその場を立つた。

その時のことが鮮明に胸の痛みとともに思い出してラドビアスは顔をしかめる。あの判断は正しかったのだろうか。

あれから五百年もの長い年月を共に過ごしはしたが。

しつこいのはヴァイロンにこだわっていたカルラのほうか。自分でほうなのか。

主従ともに報われないことにこだわっていたものだ。

「ばかみたいですね」

一人ごちてクロードを軽々と運ぶとラドビアスは、獵師小屋の門を開けて闇へと消えた。

「お早う、ラドビアス」

大きく伸びをして起きたクロードは、壁にもたれ掛かるよつに座り、足を投げ出しているラドビアスを見る。

「お早うございます。クロードさま」

「うつすらと笑う従者の男の顔にくまがあるのに気づいてクロードは心配げに声をかけた。

「ねえ、寝られなかつたの？　おれのせい？」

「いえ、寝られなかつたのは本当ですが、それはクロードさまとは関係ありません」

「ラドビアス？」

なんでもありませんよと笑いながら立ち上がつた彼は、クロードにその先を答える気はまったく無いかのよう。

「昨日は皆、幸せだつたのかなあ？」

クロードの問いにわけ、とラドビアスは応じるとそれと同時に準備を整える。

「この山をさしつゝと越えてしまいましょう。クロードさま、小屋を出て峠に差し掛かつたクロードは、超えてきた山々を振り返つてうつと声をあげる。

クロードの目前に広がる荒涼とした荒地。

そういうえば何か焦げたような匂いも。

「あそこは、昨日は林だつたところだよね。何で？　どうして一晩でこんな事に？」

助けを求めるように向いた先にいる従者の顔を見てクロードはごくつとつばを飲み込む。

「ラドビアス？」

「クロードさまの精神衛生上よりしくなこと思いまして」

「だからって」

「これで見通しがよくなりました。まあ、行きましょう。魔獣も我々を見つけやすいでしょう」

晴れ晴れと語るラドビアスに一の句が告げない。

祭りの晩は恋人が思いを育むんじゃなかつたのかよ。昨日の晩はいきなりあがつた炎にさぞかし大騒ぎだつたのだろう。何があつたのか。

考えたくない、クロードだった。

6 砂漠からの風（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっておつます。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」 その後「イーヴアルアイ」

ラヂビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」 その後、「ラヂビアス」

6 砂漠からの風

(六)

吹き付ける風が熱を持っている。

砂漠からの挨拶の一端なのか。

それとも異郷に踏み入る者への威嚇なのだろうか。

焼けるような痛さを頬にもたらした一陣の風に驚いて、クロードは後ろのラドビアスを伺うように見る。

「ラドビアス、今の風は？」

「ああ熱砂の風と言われる物ですよ。もう、そんな風の吹く土地に入つたのですね」

ラドビアスは感慨深く言つと、通り過ぎていった風の軌跡を目で追つた。

「ここは、西側と東側の文化の境目なんですよ。地域的にも西側の国からハオタイ皇国になります。ハオタイの首都キータイに入る前に砂漠がありますからね。そのせいでしょう」

「ハオタイ？ そうか、ハオタイに入つたんだ」

田指すべオーケ自治国はハオタイ皇国的一部だ。その、ハオタイに足を踏み入れたことに嬉しさを感じてクロードは歩みを速める。「ハオタイと言つても、この国はこの大陸のほとんどを占める広大な国ですからね。ここなど、まだ西側の方が近いくらいですよ、クロードさま」

「やうなの？」

ラドビアスの宥めるよつた言葉に、少し落胆して立ち止まつたクロードを追い越してラドビアスが先に行く。

「ソルは、わたしの故郷なんですよ」

ぼそりと言つたラドビアスの一言。

「だつてラドビアスはベオーク自治國の人じやないの？ ベオーク

からレイモンドールに来たんだろう？」

ええ、とうなずきながらラドビアスはクロードに答える。

「ベオークに行く前に、十歳までわたしはここで暮らしていたんですね」

ラドビアスは、街を少し外れた大きなお墓の前に立つ。

古くて文字さえ、消えかかっている黒曜石に彫られた名前。それを懐かしそうに指でなぞる。

「何て書いてあるの？」

「クラビア・ガイン・ゴラハト、そう書いています

「知り合いなの？」

「はい、クラビアはわたしのいとこです。ソルの領主になつたようですね、良かつた」

立ち上がり大きな墓廟を見上げる、ラドビアスの様子にクロードはなかなか話しかけられなかつた。朽ちそうな昔の領主の墓に立つ彼の心情はどうなのか。

クロードには推し量るのも難しいが。 知り合いなど全て歴史の中に埋もれるほどの昔。 彼はその時代の人なんだ。

知つていたが、実感が今までわいてこなかつた。 だが、この砂に埋もれてしまうのではないかと思うほどの古い墓廟に眠る人と生きていた 一気に時間の波に飲み込まれていくよつた錯覚の中、クロードはただ、佇む男を見ていた。

「彼は、わたしの母の兄の『ジモ』もでした。一いつ上で仲が良かつたんですよ」

唐突にラドビアスが話しうけてクロードは、彼が過去に戻つていくのだと思つた。

遥か昔、五百年以上前のダルファンに。

「ラドビアス！ ビーー？」

茶色の髪を編みこんだ少年が、開放的なアーチ型天井から伸びる柱の間を縫いながら走つていく。

「ラドビアス？ 降参だよお、早く出て来いよ」

降参の声にくすくすという笑い声がして。 声を頼りに少年は天井を仰ぐ。 すると少年の鼻の先へストンと褐色の髪の少年が飛び降りてきた。

「なんだあ、上に隠れてたんだ」

「下ばかり見てるから見つけられないんだよ、クラビア」

偉そうに笑う自分より一ひとつ下の少年をがしりと捕まるとクラビアは、脇に手を伸ばす。

「兄さんにそんな偉そうに『いつやつは』『いつじ』やる」

「わああ、やめて、やめて、『ごめんなさい』、クラビア」

こそばされて体をよじりながらラドビアスは必死で自分を拘束する腕から逃れた。

「ねえ、侍女たちが探しに来る前に部屋に帰つたほうが良くないかな」

「ラドビアスはまじめちやんだな。でも怒られるのは僕も嫌かも。じゃあ帰らつか」

「うん」

二人の少年は長い回廊を奥へと進んだ。

ハオタイの西の端、ダルファンはハオタイ皇国に多いハオ族と違

い、西側と同じアーリア人の多い地域だつた。話す言葉も西側の国で使われている古代レーン文字から発展してきたアーリア語である。勿論、公用語はハオタイで使われている藩語なのだが、市井の者などそんな事は知る由もない。

しかし、この砂漠近くのダルファンを支配している一族の長、アウバール・ガイン・ゴラハトの屋敷に住むこどもにおいては、しつかりと藩語も習っているはずだろう。

長男のクラビア、そしてアウバールの妹の息子、ラドビアス。

二人はここに支配階級に属しているのだから。

長めの金糸で隙間なく刺繡された袖なしの上着にゅつたりとした裾を絞つたズボン姿の二人の少年。彼らは、自室の部屋の長いクッシュョンにごろりともたれながら銀の皿から葡萄の粒をちぎつては口に入れていた。

「きみは、このままここに領主になるんだろうなあ。でも僕は？僕は何をしたらいいんだろう？」

ラドビアスの指から葡萄の粒を奪い取つてクラビアは、もぐもぐと口に入る。

「ぼくの手伝いをすればいいじゃないか。嫌なの？」
「嫌じゃないけど」

ラドビアスは、そう言うと顔を逸らした。

「僕は、父無し子だもんな。何でみんな母さまにあんなに寛容なの？ 僕だってとても大事にされている。だけど母さまは結婚もしていらないのに僕を産んでさ。それってやつぱり人の道に外れているよね」

ラドビアスの真剣な顔にクラビアは、持つていた葡萄の房を皿に置いた。

「父親が誰だとかは、ぼくも知らないけど。ラドビアス、おまえはぼくのいとこじゃないか。誰が悪口を言つのもぼくが許さない。だから安心していいんだよ、ラドビアス」

「ありがとう、クラビア」

なんとなく、じんときて一人は手を取り合つ。

僕はここに居ていいんだ。ここに居てクラビアを助けていく。ラドビアスは胸が詰まつたよつた苦しい、でも嬉しい、そういうのは嬉しいんだと、目の前のいとこを見つめた。

しかし、感動の場面はいつもあつさりと終わりを告げる。いきなり、大きな衝撃音とともに窓枠を大きくぶち割つておおきな物体が飛び込んできたのだ。

「な、何」

手を取り合つたまま、一人はじりじりとあとずから。怖くて背中を向けて逃げることなんて出来ない。

「つづくまつた物体がゆつくつと体を伸ばした。やう、ぐるっとおおきく伸びをしたのだ。

「豹？」

ラドビアスの声に応えるよつとそれは喉を鳴らした。雪のよつに白い大きな、実際、ラドビアスは豹など、図書庫にある図鑑でしか見たことなどないが。

それにして大きな体だ。そして、口からはみ出すほどの牙が見えている。

「おまえがダリアか」

一瞬、誰が声を出したのか分からなかつた。

「おまえがダリアか」

同じ台詞を豹が……口にした。

「た、助けて」

クラビアは泣きそうな、いや、もうすでに泣いていた。泣きながらラドビアスの手を振り払つて部屋の隅に逃げて行く。しかし、

ラドビアスはその豹が言った名前に反応して一步踏み出した。

「ダリアは僕の母だ。おまえは何者？」

「私は、使者だ。ダリアとダリアの息子を迎えてきた」

「迎えについて、どこへ」

「我の主人の元へ」

訳がわからないが、とにかくこの豹は害をなそうとするわけではないようだった。尚も質問をしようとするラドビアスは、大きく扉を開け放つて入つて来た警備の兵たちによつて引き離されてしまう。

「ラドビアス様、お早くお逃げください」

「待つて、違うんだ。この豹は使者なんだ」

ラドビアスの声は大勢の兵士の大声と豹が吼える声によつて搔き消える。

猛然と兵の中に踊りこんだ豹は、その大きな牙で次々と喉笛を噛み切つっていく。

俊敏な動きに兵士の誰もついていけない。

「やめて！ ねえ、違うんだから」

叫ぶラドビアスの目の前に出来ていく死体の山。叫んでいたのはほんのわずかな時間だったのか。気がつくと豹は、返り血を浴びて真っ赤に染まった体を軽々とラドビアスの方へ運こんできた。

「ダリアのところへ行く」

これ以上被害を出すわけにはいかないし、ラドビアスが逆らえるわけもない。

「わかった」

歩き出すラドビアスの背中に小さくかかる声。

「ラドビアス、行くな」

「大丈夫、話をするだけだから。待つてて、クラビア」

「……ラドビアス」

「どうなつたの、それで？」

ラヂビアスが黙った途端に問いつ声。 セツセツまでの態度を変えて

クロードは勢い込んで尋ねる。

「あれきり、ダルファンには帰れなかつたんですよ。ベオークに着いたと思つたら、コリウスさまの姉君ハイラさまに捕まつて危うく食べられるといひで。そこをバサラさまに助けられたんですよ。それが縁でわたしは、バサラさまにお仕えすることになつたんですよ」「じゃあ、誰の使いだつたのか分からなかつたの？」

「ええ、母は何も教えてくれなかつたんで」

「お母さんはどうなつたの？」

「さあ、いづれにしてももう死んでいます。ベオークについてから生き別れて音沙汰もなし。あれから五百年以上経つているんですよ。何があつたとしても大昔の事です」

そう言つてラヂビアスは、もつ一度墓石にそつと触れた。

「だけど、じどもを食べやつてココウスの姉さんつてどんな奴なんだ？」

クロードは気味悪そうに聞く。

「ハイラさまですか？ 一言ではとても言えませんよ。破格な方です」

つて、どうこいつ」と？ そう聞きたかつたがラヂビアスはせつと歩き出した。

「それと」

「それと 何です？」

クロードは、田の前でくつろいでいる魔獣を指差す。

「おまえたち、しゃべれるんじゃないのか？」

アウントウーンは軽く顔を背けて小さく炎を吐いた。 サウンテ

イトウーダは大きく口を開けてぐわっと一聲出すと頭をヒラヒラと
横に振つて見せる。

「うーん、結局どうちなんだ？」

知らん顔をする一頭の魔獣を見ながらクロードは考え込む。
果たしてしゃべることが出来たほうがいいのか、否か。

そこへ、また砂漠の風が吹き抜けて行つた。

7 一いつの竜印（前書き）

「レイモンド・ドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっておつます。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・・ベオーク時代 「カルラ」 その後「イーヴアルアイ」

ラヂビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」 その後、「ラヂビアス」

(七)

とつとつ、その時が来たのだ。待ちにまつた瞬間が。

クロードは、自然に湧き出した温泉に足をそっとつけながら後ろにいるはずの男の様子に全神経を集中させる。

「あうひ

思ったより湯の温度が熱くて、大きな声をあげてしまつ。

「大丈夫ですか」

駆け寄ろうとする従者の気配に、クロードはあわてて声をあげる。「だ、大丈夫。は、早くラドビアスも服を脱いでおいでよ。結構慣れると気持ちいいからさ」

何が見たいってクロードはラドビアスの裸の姿が見たいのだ。お湯が大きく揺らいでラドビアスが入つて來たことが分かり、クロードの緊張も高まる。

「ああ、本当ですね。少し熱いですがいいお湯です。このところ、水浴びだけでしたから気持ちがいいです」

後ろを振り向かなきや。ええと自然に振舞え。 ゆつくつ……。

「クロードさま?」

クロードの気持ちなんかに關係なくラドビアスがいきなり、そういきなり回り込んできたのだ。

「ラ、ラドビアス、な、何?」

「何つて、はい、綿布ですよ。体こすつてください」

「あ、ああ」

湯気に邪魔されて良く見えないが左胸には何の痕跡も無い。それは、そうだ。自分の胸元に目を移してクロードは目を伏せる。

ユリウスのしもべである証の竜印があるわけもない。彼は死んだのだから。

「おれが……殺した」

もう、酷く落ち込むことなんて無いと思つていたのに。彼を失つた悲しみと自分の犯した罪は、引いていたかと思うと自分を飲み込むほどの大波になつて帰つてくるのだ。逃げられない。否、逃げてはいけない。だけど おれは。

彼を愛していたのに。兄だと、家族だと、ユリウス、おれはもつと君にいろいろ教えてもらいたかった。それだけじゃない。

「魔術だけじゃ……ない」

「クローデさま」

ラドビアスの気遣う声にクローデは、はつと深い意識の奥から引き上げられた。

「どうが、しましたか？ 気分でも悪いですか？」

自分に伸ばされた手をやんわりと振り払つてクローデは、思いついたように大声を出す。

「ねえ、ラドビアス。背中流してあげるよ」

「なんか企んでるんですか、クローデさま。でも遠慮なくそうさせていただこうと思います」

でもその前に、とラドビアスはクローデの背後に回つた。「先にクローデさまの背中を流してからになります」

「おい、それじゃあ見えない」

「見えない？ 何がです？」

口をすべらせたとクローデは氣づいたがすでに言つた後だ。言葉は自分の口には返らない。

「いや、なんでもないよ」

乳白色に濁つた湯の中で大人しくラドビアスに背中を流してもらひながらクローデは、ふと考へる。

ユリウスつてよく、ラドビアスにおまえなんか嫌いだと言つてたけど。本心じゃないよな。だったら、あんなに長く一緒に

いられないよな。 何が気に入らなかつたんだろう？

「ラドビアス？ おまえコリウスが嫌がることをしたことがあるの？」

「え？ とラドビアスはいきなり降つて来た謎の質問に背中を流す手を止めた。

「何の事ですか」

「あのさあ、コリウスつておまえへの扱いが結構酷かつたじゃないか。どうしてなのかなと思つてさ」

ああと安心したかのような笑顔になつてラドビアスは作業を再開する。

「あれは、わたしに甘えていらしたのでしきう。の方の側近で歳が上なのはわたしがらいですからね。それにわたしはしもべなんですから別にどう扱われてもいいのですよ。そんなことではなく……」

「何？ ラドビアス」

急に黙りこくつた相手に驚いてクロードは後ろを振り向く。

「どうしたの？」

「主は、コリウスさまはわたしのこの顔が気に入らなかつたんですよ」

「ええっ？」

顔つて言つても、紅顔の美少年つていう歳でもなく、白皙な美青年でもないが。 ラドビアスの顔が悪いとは思わないんだけど。派手な顔じゃないけど落ち着いた大人の顔だ。

安心できると、頼みになると思わせるような穏やかな顔。 このどこが嫌なのかクロードにはさっぱり分からない。

「何か理由があるの？」

「さあ、顔の好みだけはどうのいつのと言つても仕方ありませんからね」

ラドビアスは、口元を緩めたがクロードには笑つてゐるようには見えなかつた。 なんだか泣いているような。 この話には何か理由があるのでと分かつてしまつたが、強引に聞くわけにもいかない。

そのままここ空氣の中につの間にかクロードはのぼせてしまつて、いたようだつた。氣が付くと、広い岩場の上に敷いた毛布に寝かされている。

「あれ？ おれどうしたの？」

「ゴリウス、最低と仰りながら倒れておしまいになつたんですよ。はい、お水」

上半身を起し、クロードにすかさず、水の入った水筒を渡してラドビアスは、クローデの腕に触れる。

「だいぶ、ほてりもおさまりましたね。魔獸たちも待つていいでしょうから、戻りましょうか？」

「うん」

結局、何も分からなかつた。

ゴリウスが死んで竜印が消え、他の竜印を受けていたしもべは皆消えてしまつたはず。ところが ラドビアスだけは生きているのだ。バサラが生きているからなのか。

ゴリウスの兄、バサラは自分がこの護法神の剣で殺したと思つていたが。違うんだろうか、ラドビアスの最初の主人はバサラだった。彼の竜印が残つている そういうことなのか。

黄みがつかた白い肌に浮かぶ、龍の形。

前に見た、バサラのしもベインダラの背中にあつた竜印。それがラドビアスにあると。

それを確かめたかったのだ。

「ラドビアス、おまえ誰に仕えているんだ？」

「それは、もちろんクロードさまでですよ」

「じゃなくて、おまえが今生きているのはなぜなのかと聞いているんだ。おまえ、五百歳は軽く超えているんだ。何か理由があるはずだろ？」

「それは……」

言いにくそうにラドビアスは続ける。

「バサラさまの印が　わたしには残っています」

やはりそうか。　バサラはまだ生きているんだ。

思わずクロードは唇を噛む。　ユリウスが命を投げ出したのに。　彼が死んでバサラが残ったなんて。　だけどだからラドビアスも生きているんだ。　失つてしまつたものと取り留めて置けたもの……どちらかを今更選べもしない。　おれにとつてラドビアスももうすでに失いたくない、絶対に。　そんな存在なんだから。

「おまえにとつて竜印を受けた主人ってどういう存在なんだ?　ガリオールやルークは、絶対無二の存在だと言つっていた。竜印を受けたしもべは、主人に絶えず惹かれ続けるのだと。おまえはどうなの?」

「わたし　ですか」

投げられたクロードの問いにラドビアスは、困惑の面差しを向ける。

「ユリウスさまをずっと想つてまいりましたが。　バサラさまもわたしには大事な方です。命をお助けいただきてしまふにして頂いたのですから」

「でも、それは理屈のつかない思いとかじゃないだろ?　竜印つて理屈で好きとか嫌いとかじゃないはずだろ?　その感覚はおれにだってわかるよ。おれだって少しの間だけユリウスの竜印があつたんだから」

一つに結び合つてゐるような、鎖とかそんなものでなく、暖かい物でつながつてゐる。　いつもユリウスのことが頭にあって、彼のことが気になつて……。しかし、このところ前よりは顔色が戻つてきたラドビアスは身の中に一つの竜印を持っていたのだ。

二人を主人に持つていた彼はどちらを優先してゐたのか、いないのか。　果たしてそんなことが出来るのか。

「それは　わたしにも分かりません。ユリウスさまをお慕いする

気持ちに偽りはありませんが、バサラさまにも逆らえない。でも、抗えない、そういうのでもない。わたしは他の僕とは違うのかもしれませんね」

苦しそうに言つたラドビアスにクロードは、もう何も聞くことができない。何百年経つたところで、知りえないとはあるのだ。

一番それを知りたいのはラドビアス自身なのだから。

*

「クローデさま」

「何？」

「いい加減、服着ませんか？」

ラドビアスの言葉に我に帰るとクロードは自分が素つ裸だつたことを思い出す。別にラドビアスに見られたことが無いわけじゃないが。気づけば自分だけ裸つてなんか。

「するい」

結局、おれはラドビアスの裸を見られなかつた。いや、見たかったのは、裸じやなかつたんだがこの際、問題は裸だ。

「もう、一回温泉入るう」

「はあ？」

「今度はぶつ倒れないぞ」

「何の宣言ですか、それは」

「だからさあ」

「嫌です」

二人の問答は待ちきれなくなつた魔獣がやって来るまで続いた。

8 書だるま（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっておつます。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」 その後「イーヴアルアイ」

ラドビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」 その後、「ラドビアス」

(八)

広大な美しい枯山水の庭。陽の光を受けて眩しく光る、池を模して敷かれている石は大小の青玉。道を表す白い小さな石は加工された大理石。そこにあるものは、本来ならば屋敷の中に大事に置いてあるような高価な品ばかり。

だが、あたかも普通の砂利のように扱われている。それも今は一面、白い雪の覆いがかかつっているせいで見えはしないのだが。

ベオーグ自治国はハオタイ皇国の首都から北へ僅かに逸れた高地にあるため、冷涼な国である。そのため教皇の正装は、雪豹の毛皮のついた分厚い外套を羽織ることになつていて、ほどだ。

そして季節は、新年を迎えた頃。ピンと張り詰めた糸のような寒さがベオーグ自治国の宮殿、朝陽宮にも遠慮することなく隅々まで入り込んでいる。しかし、教皇の一族の居室は、張り巡らされた結界によつて寒さとも無縁の暖かさなのだ。

一年を迎える新嘗祭の宴が行われている大広間の近くの一室。そこには、いつも大陸のどこかへ出かけていたりと全員集まるんじゃない教皇の一族が集まつて、彼らの随従たちも久しぶりに顔を合わしていた。

「あらインダラ、お久しぶりね」

「ショウトラか」

「ハイラさまが大陸の南へお出かけになつていたから、ここに戻る

のも一年ぶりなのよ。もつと嬉しそうにしてもいいじゃない

「なんで嬉しそうにしなきゃならないんだ？」

さも、嫌そうに細い目を一層細めて、四男バサラのしもべ、インダラは横を向く。相手にされていないのも一向に気にするでも無く、次女ハイラのしもべ、ショウウトラはその太くて短い首を傾げてみせた。

その仕草は、少女や、妙齢の女性であつたなら、思わず笑みがこぼれるものだつたろうが、やつた人物が悪い。

しもべは主人に似るものなのか、ハイラを主人に持つショウウトラは、驚くほどがっしりとした身体をしていた。主人であるハイラは女性であるのだが、外見はそこらの兵士などよりもよほど男らしい肉付きをしていた。そのため、激しく文物が似合わない。そのままのしもべであるショウウトラは男である。元来魔道師には女性はないのだから当然なのだが、主人を上回るたくましい体を持つしもべの心は女だつたようで。それが問題といえば問題なのだ。

しもべは、主人に自分の所有であることの証、龍印を施されて不老と不死に近い体になるが、影響はそれだけでは無い。彼らは龍印を体に刻み付けられた時点から身も心も主人の物なのだ。いつも主人の事を想い忠義をつくすようになつていて。

が、ショウウトラの興味は他の男たちにも向く傾向があつた。

バサラのしもべであるインダラもサンテラもこの時にはまだ龍印は刻印されてはいない。だが、だからといって、インダラがショウウトラを受け入れるはずも無いのだが。

「ねえ、インダラこの後暇？」

「おまえに向ける時間なんてあるわけがない。気持ちの悪いことを言うのはやめてくれないか」

自分に無いものを求めるのか、ショウウトラは細身の男が好きらしい。媚びた視線に耐え切れず、インダラは座っていた椅子から立ち上がると、窓辺に凭れていた男の方へ行く。

「あいつ、どうにかしてくれよ。気色の悪いことつたらないぜ」「……なに？」

インダラに話しかけられた男は、外の様子に目を奪われていたせいか、インダラの話についていけずにおざなりの返事を返す。

「聞いてなかつたのかよ。で、何を見ていた？」

インダラが窓をのぞく。そこにいたのは、亜麻色の髪を肩下に流した黒の縄地に金糸の刺繡を施した豪華な式服を着た、まだ十歳くらいのこども。式典に退屈したのか抜け出して庭で遊んでいるらしい。

「あれは、カルラさまだな。この富でこどもなんてカルラさまか、ハイラさまの食事しかいないからな」

「お寒くはないのかな？ まだカルラさまにはしもべはいなければ、御つきの者はいるだろうに」

そう言つうが早いが、インダラの横にいる男は窓を飛び出していく。

「おい、サンテラ。待てよ」

言つてはみたものの、追いかける氣も無くインダラはやれやれと肩をすくめる。

「カルラさまがお可愛いのは認めるが、あの執着はどうかと思ひづ。わたしには分からないな。わたしは、やつぱりバサラさまがいいし」
呟きながらインダラはまたも目を細めて窓の外を面白そうに眺めた。

*

「風邪を召しますよ、そんな薄着で外にお出ましになられでは、しゃがんで一心不乱に雪を固めていたこどもが顔を上げる。

「おまえ兄さまのしもべの一人だな」

「さようございます。サンテラと言います」

「ふーん、おまえ、雪をたくさん集めろ」

大人に見つかったのにまるで驚くでもなく、そのこどもは声をか

けてきた男にそれだけ言つとまた作業に戻る。

遊びを止めるように言つつもりだつたサンテラだったが、仕方なく雪だるまを作る要領で転がしながら雪を集め出す。

「子どもの背丈ほどの雪玉を三つほど作つて、今も作業に没頭中の子どもの元に転がしていく。

「このぐらいでよろしいですか」

「……おまえっ」

顔を上げたカルラの強い声に叱責を受けるのかと思つたサンテラだが、その顔に浮かんでいたのは歓喜の表情。

「これ、おまえ作ったの？ どうやつたの？」

「はあ。 こうやって転がしただけですが」

あまりに子供らしい反応に口元が緩むが、そこはぐつと堪えて眞面目な口調でサンテラは先ほどやつたように雪玉を作つていく。と、雪玉に手をつくサンテラの横に伸びる手。

「わたしもやる。転がせばいいんだな」

「はい。でもお手が冷えますよ」

「つるさい、黙つてやれ」

いつの間にか、カルラと二人してそちら中の雪を集めて巨大な雪玉がいくつも庭に出来ていた。

「たくさんできましたね」

腰に手をやりながら、薄つすらとかいた汗を懐から出した綿布で拭つていると、こちらを見上げて笑うカルラと目が合つ。

サンテラの主人、バサラの十歳年下の同腹の弟。初めてバサラにサンテラが会つた時にこのこどもはそつくりだつた。あのときも自分はバサラの美しさに驚いたものだつたが。

こうやって弟を見ても同じようにサンテラは、感嘆のため息をついてしまう。しかし、バサラに対しても感じなかつた気持ちが確かにカルラに対してはある。そのことに前から気づいていた。動いてほかほかしていた体が急速に冷えていくのを感じて、サンテラは急いで上着を脱ぐとカルラに着せ掛ける。

「恐れ多いことを申し訳ありませんが、部屋にお戻りになるまでこのままでご容赦ください」

「ふん、重いな。靴が濡れて冷たい。おまえ、わたしを部屋まで抱いていけ」

尊大な口をきいて手を差し向けて見上げるそのすがたは、なんとも愛らしいのだと、サンテラはまたしても口元が緩むのだった。軽々と自分の服ごとカルラを抱き上げて庭にある東屋に向かい、中にある椅子にカルラを降ろす。

「濡れた靴を脱がせますので失礼します」

「早くしろ」

式服と同じ絹張りで刺繡が密にしてある靴は、冷えてぐつしょりと濡れて肌に張り付くようになっている。これではあかぎれになつてしまつだらう。靴を脱がせて自分の服の内側で丁寧にぬぐう。一連のサンテラの行動を見ていたカルラが焦れたようにサンテラの首に手を回してきた。

「もういい。早く連れていけ」

「かしこまりました」

もう一度綿が入っている上着を着せようとすると、カルラにはじかれてしまい、驚いたサンテラが問うように見る。

「おまえが寒いだらう。おまえが羽織つてわたしと一緒に抱き込めばいいだらうが。頭使え、頭」

「それは」

「なんだ、わたしと一緒に服にくるまるのは嫌か」

上目遣いで心配そうに見上げる顔は、言葉ほど大人ではない。嫌なのかと兄のしもべ相手に氣を使うがたに湧き上がる感情。

そうだ、わたしはこのお方がいとおしいのだ。バサラに感じている信頼、尊敬、親しみと言ひ名の物とは違う感情。立場を忘れて抱きしめてしまいたくなる。頭を撫でてこども扱いしそうになるのをぐっと堪える。

「いえ、カルラさまが仰つてくださつたなら喜んでそうさせていた

だきます

「じゃあ、そうじる」

「はー」

しつかりと首に手をまわしていくカルラを抱き上げて、上着です
つぱりと包むとサンテラは歩き出した。

「おまえの匂いがする」

ぼそりとつぶやく声。

「ご不快でしようがもうしばらへお待ちを」

「不快じゃない」

「……そうですか」

笑顔のまま、カルラの部屋に戻る一人の前に回廊の先から現れた
人物が声をかけた。

「おや、その腕の中の物はなんだ、サンテラ」

「兄さま」

いきなり足をばたつかせて落ちるように転がりおりたカルラが裸
足のまま、その人物に抱きついた。

「カルラ、式典の途中からいなくなつたので心配したよ。何をして
いたの？」

ひょいと弟を抱き上げると、カルラは嬉しそうにバサラにしがみ
付きながら彼の耳元でささやいた。

「そう？ 雪で？ それは楽しそうだったな。兄さまも今度は誘つ
てくれよ、カルラ」

笑いながら頭をなでて、視線はサンテラに向ける。

「カルラはわたしが部屋まで連れて行く。ご苦労だったな、サンテ
ラ」

「いえ、それではよろしくお願ひします。靴はあとで用人に渡して
おきますので」

頭を下げるサンテラに思いもしなかつた声が聞こえた。

「おまえ、またやろうな。楽しかった。おまえは良い匂いだし
「匂い？」

「うん、抱いてもらつてるときに 良い匂いだつたよ」

「兄さまとどっちがいい？」

「え？」

カルラは、子供っぽい質問をするバサラに驚き、ちらりとサンテラの方を向いた。見つめるサンテラと視線が寸の間絡む。

「兄さまに決まつてるけど、何でそんなこと聞くの？」

「だつてカルラの一番は兄さまでいたいからだよ」

バサラの言葉にカルラは嬉しそうに納得の表情を見せた。

「わたしの一一番は兄さまに決まつてるよ。誰よりも好きだもの」

そう言って縋りつく弟を抱く手にわずかに力を加えて、バサラは唇を引き上げてサンテラを見た。

なんで、こんな田をするのだひつ？ まるで、見せ付けるような

その時は気づかなかつたことが、今では分かる。バサラはある時からすでにカルラを自分のものにすることに決めていたのだ。女性にすることを。自分の妻にすることを。カルラが自分以外に田を向けることが無いように、自分のしもべさえけん制の態度を取りついたのだ。

そこまでもバサラの計画は成就しなかつた。人の心は縛れない そんな簡単なことが、彼には分からなかつた。

「あの雪の田は楽しかつたな」

窓から見える重たい雲から落ちてくる白い粉雪を見ながらラビディ

アスはつぶやく。

「え？ 雪？ 雪が降つてきたの？ わーい、積もつたら雪だるま作ろう」

雪といつ言葉に反応して窓際に寄つてきたクロードが、十六歳と

も思えないほどの、せしゃせながらラジニアスを見上げてくる。
「やうですね、たくさん作りました」

ラジニアスは満面の笑みでやう答えた。

9 願望 前編（前書き）

この回は前編と後編に別れています。
長くなつてすみません。

「レイモンドール綺譚」の外伝です。
一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっています。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーヴァルアイ」
ラドビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

(九)

おまえの望みは何だ。

叶えてあげると書いたらおまえはもうする。

でも、それは 本物ではない……。

「ここの先の山に登るのは止めたほうがいいぜ、旦那」「だめなの？」

呼びかけた男の側にいた少年の問いかけに猟師の男は、重々しくうなずく。

「ここは、靈山だ。この奥にある泉に願をかけると願いが叶うという噂がたって、何人もこの山に入つた人間がいたが」「どうなったの？」

興味津々といった少年を、厳しく咎めるように咳払いをした猟師は先を続ける。

「ある者は、半月も山を歩き回つてほとんどの記憶を無くしていたし、だいたいの者は、泉の存在など確かめる間もなく、山に住む狼か、野犬に食い殺されてしまう。少し遠回りになるがこの先を迂回したほうがいい」

「狼がいるんだ、ふーん、どうする?」

「時間がかかるのは嫌ですね。ここを行きましょう」

「おい、おまえ。人がせっかく忠告してやつたってのに」

猟師が大声でどなるのを目の前の青年は虫を追いかげるように手を振る。それでも口調はどこまでも丁寧で。

「「心配ありがとうございます。先を急ぎますもので、この道を行かせてもらいます。あなたからそのお話を伺いましたので、充分注意しながら行く事ができます。では、失礼します」

ぽかんとする獵師を尻目に青年は、行きますよと少年の背中に手を置く。話を聞いていたはずの少年さえ、怖がる素振りも無い。

まつたく、語り継がれている事に耳を貸さないとは困ったもんだ。そういう類の話には何かのわけがあるものだ。

「わしは確かに教えてやつたんだからな。あの世で後悔するんだな」彼の中で、あの二人は死んだも同然だつた。肩をすくめながら獵師は、尻尾を丸めて動こうとしない自分の犬たちに目をやる。

「どうした？ 何をそんなに怖がっているんだ。まさかわしの話に驚いたのか？」

その近くに異形の物がいた事に彼は気づかなかつた。狼なんかより、野犬よりもやつかいかもしれない 少年の連れが。

誰も通らないと言われるだけあつて、道はもう道の形状をとどめていない。獸道のような道。先を行くアウントウエンが目の前の枝を小さい炎で焼いていく。枝くらい自分たちには何の障害にはならない。これは、クロードが怪我をしないようにとの魔獸なりの心遣いらしい。靈山に対しての畏敬の念などないのだから。「狼があ、アウントウエン、出て来たら一緒に遊ぶ？」

その気持ちを知っているのかと、クロードの言葉に赤い魔獸は、ぱかにすんなよというように一聲吼える。彼といえば、あははと笑ながら鬱蒼と茂る広葉樹の中を行く。だいたい、クロードやラドビアスが前にいたレイモンドール国。そのハングル山にしても靈山だつた。禁忌の山といつところなど、彼らに恐れる理由などない。禁忌とされる理由があるにしても、それが何かという疑問がわくだけ。恐ろしいなどと思つクロードたちでは無かつた。と、いうより自分たちこそがまさに恐ろしいもの、であるのかもしれないのだから。

ラドビアスが、疲れたとつむさいクロードに根負けして、途中から一人は魔獸に乗つて居た為あつといつ間にその山の頂上近くに着く。

だいぶ上に来たようで、景色は一変している。下では褪せたような色だったのが、ここの大葉樹の葉は、目もくらむほど紅葉していた。何か別の場所にいるような。山が隠してきた自分の宝をつかの間見せびらかすような、感嘆する言葉しか見つからない。そんな風景にクロードもラドビアスも魔獸から降りるとしばらく声も無く見つめていた。

しばらくして何かを促すようなサウンティトウーダの声。耳を澄ます、ラドビアスはかすかな水音に気づく。

「喉が渴きませんか？ クロードさま。近くに水場があるようです。待っていてください、汲んできますから」

「早くね、喉からがらだよ」

クロードの返事に、わかつておりますと笑いながら応えてラドビアスは、音のする方へ足を進めた。

乾いた落ち葉を踏む音が次第に湿り気を帯びてきて、黄色や赤のカーテンをぐぐるようになりラドビアスは歩き続けた。ぐぐる度にどこか空気がしつとりとしているように感じる。どこか違う場所に入り込んでしまったという感覚。それを振り払うように頭を振つたラドビアスは、目の前の光景に思わず声を上げた。

「これは」

探していた水場だつたが、目の前にあるのは、人為的に作られた物だつた。壁は石で補強されていて、竜の口から透明な水があふれ出ている。その前に広がる丸く石積みで作られた小さな泉。これが獵師の言つていた泉なのか。

もつと神秘的どころかと思っていたラドビアスは、自分の思いこみに笑みを浮かべた。昔、旅人のために作られた水場だつと見当をつけて、その透明の水を水筒に移す。

「なんと言つていたのだったか、あの獵師は」「確かに願いが叶うとか。

ばかりしいと笑う自分のどこかに、ここで言つてみよつかと思つている自分がいた。

自分の願い。

長命でもなく、普通の人間の自分。そして普通の人間であるの方と出会つ。

「ばかな、わたしどきたら何を言つて……」

心の中で言つた自分の願いを即座に打ち消すように首を振つた。そのせいだつたのか、急に目の前が暗くなる。だと、そう思つてゐるのに体はそのまま泉の中に倒れこんでいった。

*

次に彼が目を開けたのは、陽が暮れた後。自分が寝台に寝かされてゐるのに気づいて、困惑氣味に周りを伺つと亞麻色の髪が目にに入る。

「起きたのか？」

「カルラさま？」

「何？」

自分が口にした名前に、覚えが無いことにラドビアスは首を傾げた。

「カルラとは誰だ？ それより自分は、誰だ？」

「ここはどこでしょう」「

「どうして、どうした？ やはり頭を打つたんだな。おまえ、庭の噴水の所で倒れていたそうじゃないか。このところ忙しそうにしていたから、無理を重ねたのかもしれないな」

心配そうに見下ろす彼女は、ラドビアスの手を取る。

「ここは、ランゲルダー子爵の城だ。わたしは、ここの中女のエレン。庭の泉の側で妹がおまえを見つけたらしい。おまえは、執事の息子のラドビアス。父上が今年亡くなつてから事務方で働く事にな

つた。「まったく覚えてないのか」

わずかにハスキーなアルトの声に、ラドビアスは話の内容など何も入ってこなかつた。ただ、懐かしくて、嬉しい。どうしてそういう思いのかも分らないのに、胸が締め付けられるほどの幸福感にまたもや彼は戸惑う。

「おい、こら、何をぼけつとしている?」

頭をはたかれて、ぎくじと田の焦点を合わすと、Hレンと名乗つた女性がもう一度ラドビアスの頭をこづく。

「おまえ、いい加減にしろよ……」

そこへ、盆の上に何か汁物をのせて十四、五歳くらいの少女が入つて來た。

「姉さま、また乱暴な口きいて。外まで聞こえていましたよ」

「聞こえたつておまえとラドビアスしかいないだろ」

ふんつと盛大に鼻から息を出してHレンは、それでも妹に自分の場所を譲る。

「わたしは、領主への上納金の遅延の釈明文を書かなきやならないんだ。もう執務室に戻る。気分がいいなら後で来てくれ」

Hレンは、もーと頭を抱えて見せて戸を開けてそつと、出て行つた。

姉の言葉を受け、ラドビアスが体を起しす。驚いてシャロンは押しとどめようとするが、それを片手で止めてラドビアスは起き上がつた。

「熱は無いよですしね、Hレンの部屋を教えてもらえますか。書類を書くくらいなら、お手伝いできると思います。記憶はやはり戻つてきませんが」

「……わかつたわ」

シャロンは、困りながらもうなずいた。

部屋をノックすると、うるさいこと中から一喝された。それだけでシャロンは、申し訳なさそうに、引き返そつとしたが、ラドビアスは構わず、戸を開ける。

「おまえ、だめだと言つたわい。今は忙しいんだから、
言いながら振り返つたエレンは、相手がシャロンではないのが分
つて表情をやわらげた。

「いいのか、もう」

「それを 見せてもらえますか？ お手伝いします」

強引に奪つよう書類を取り上げると、ラドビアスはさっそくエ
レンの横に座ると書類に目を通し出す。

「これは、結構余分なものまで上納要求されてるようですが、訳
をお聞きしてもいいですか？」

「それは、前年度足りない分も加算されているせいだわい。おまえ、
ぜんぜん思いださないのか。他人行儀だな」

「はい。それより、二年前の時点では、ここの土地には三分の比率
でしか、計算されていないのに、前年からば一分の割り増しになつ
ておりますよ。領地の地図と、請求額の書類を全部出してください
事務的にきつぱりと言られて、エレンは棚から書類箱を取り出す
とラドビアスの手の前にドンと置いた。

「おまえ、急に仕事ができるようになったじゃないか
恐れ入ります。なんとなく分るんですよ」

「ふーん」

それでも何かいつもと様子がおかしいと、ラドビアスが書類に向
かう間、真横でエレンは身じろぎもせず、彼を見ていた。今年か
ら見習いのように事務の仕事をするようになったはずなのに、この
幼馴染の青年の様子は、確かに おかしかった。

「何かわかつたか」

「ええ、上納金はこの半分でも多いくらいです。叔父君の所領分ま
で払つているようですよ、エレン」

「か、貸せつ。どこだ？」

ここですと地図をしめした場所にエレンが手を伸ばしてにラドビ
アスの指に触れた。ラドビアスは自分が、主人の娘に敬称をつけ
ていないのに気づく。ただ、自然に口をついて出たからだ。た

ぶん、普段のわたしも彼女を呼び捨てていたのだらうかと彼は思つた。

しかし、そんなことをして失礼ではないのか。 彼女たちとわたしが幼馴染とさつき言つていた。 それが関係しているのか？ 頭でそんな葛藤をしていることをおぐびにも出さず、ラジビアスは、確認するようにエレンを見る。

「ここは、うちの所領だらう」

「いえ、この登記文書と照らし合わせてみると叔父君、バースタイン男爵の所領ですよ。 しかも、ここは閑地でしょう。 所領とみなされるほうが負担ばかり増える。 そんな土地です。だから、わざと移したんだじょ」

「くそっ、あのたぬき親父め」

「近くその場所に行つてみようと思います。 実際見てみないとどうとも言い逃れできますからね。 しかしまずは、この未処理の書類を片付けていきましよう。 なんでこんなに溜まっているんです」

「だつて」

わけが分らないんだと、膨れるエレンにラジビアスは、一つ一つ、封書を開けて読みながら説明する。 なんで分るのか、自分でも分からぬ。

結局、夜中すぎまで仕事をしたが、エレンに教えながらの作業でそんなに容易く終わるものでは無かつた。 気がつくと、彼女は机に突つ伏して寝入つている。

まだ、十七、八の彼女にこの城と領地を守つていくことなど、至難の技だらう。 側に誰か、しつかりとした後見人がいる。

それが自分だつたら……いきなりそんな思いが沸きあがる。 もしかして、わたしはエレンに特別の感情を持っていたのかと思い至る。 慌ててその考えを打ち消して、ラジビアスは立ち上がつた。

「エレン、寝るのなら寝室へ行きまじょ」

「ううん」

起きないエレンにため息をついてラジビアスは、部屋の長椅子に

彼女を抱き下ろす。Hレンの部屋がどこかも思い出せない。だが、はつきりしていることがある。わたしは、この少女に好意を持っている。自分の上着をかけてやると、浴室に戻りつつ廊下に出る。

長い廊下には、必要最小限の明かりしか無く、足元は暗い。廊下に灯す蠟燭まで削っている姉妹の生活に、少しでも助けになりたいと彼はため息をつく。

それより、あのまま彼女を椅子で一晩明かさせめる訳にもいかないと思い直し、ラジビアスは踵を返した。

後編に続きます。

これは、9の願望のつづきです。

朝、田を覚ましたHレンは、自分がラドビアスの寝台の中にいるのに気づく。部屋の主はどこなのかと、そう広くも無い部屋を見回す。すると、彼は部屋の隅で毛布を体に巻きつけるようにして転がっていた。

頭を打ったのか、ラドビアスは記憶をなくしているらしい。しかも、少し性格も違う。小さい時から知っている彼はもつと頼りないし、もつと碎けた性格だった。

いくら小さな子爵の屋敷といえば、もつと主従関係をはっきりするようにと父親に言っていたのを Hレンは思い出す。その父親も一年前に起こった馬車の横転事故がきっかけで寝込んでしまい、同乗していたラドビアスの父親もその時亡くなつた。気丈に後を継いで子爵家を維持しようと頑張っていた母親も、今年父親が亡くなつた心痛でとうとう倒れてしまつ。自分がしつかりしなくてはとHレンは、自分なりに仕事をする。

だが、今まで家の運営などやつた事も無い彼女に何もできるわけでもなく、家計はどんどん悪化していく。使用者も僅かになり、そうすると屋敷はあつと言つ間に痛む。城がどんなに維持にお金がかかるのか、生きていくにはお金がかかるのか そういう事を彼女は初めて知つたのだった。

「Hレン、お早うございます。あなたの寝室が分らなかつたもので、すみませんがここにお連れしました」

「お早う。だつたらそんな所で寝なくて一緒に寝台で寝れば良かつたのに」

「え？」

Hレンの身じろぐ気配に田を覚ましたラドビアスは、彼女の言葉に固まる。

「小さい頃はよくそうやって寝ていたじゃない。まあ、あとでおまえの父親にしつかり怒られたけど」

「こりと笑う彼女の笑顔に、またもや胸が痛くなる。わたしは、こんな彼女の無邪気な仕草や言葉にいちいち胸を苦しくしていただろうか。たぶんわたしは、彼女が思つてる以上の関係を望んでいたに違いないのだ。それを隠して寝台に一緒にに入るなんて、拷問に近い。

「あなたは、もう立派な女性なんですから、使用人、それも男性と同じ寝台で休むなどと言つてはダメです」

「ラドビアス」

お小言を言つ彼の頬にエレンの平手が飛ぶ。乾いた音に驚いてラドビアスが彼女を見ると、エレンの目に見る間に涙があふれてきた。

「ばかやう。何もかも忘れるなんて。じゃあ、あの約束も忘れたのか」

「約束……ですか。何を約束していたんでしょう？」

「知らないっ」

大声を出して駆け出そうとする彼女を止めようと思わず腰に手を回してしまい、ラドビアスはまずいと思つたが、今更手を離すのもおかしい。

「大事な約束だつたんでしょう？　だけど頭を打つたせいで思い出せないんです。エレン、わたしとあなたでどういう約束をしていたのか、教えてください」

抱き込むような形になつた後、しばらく逃げようジタバタしていたエレンも諦めたのか大人しくなつた。

「おまえは、わたしを……やつぱり、いい」

「わたしがあなたを、何です？　言つてください」

「覚えてないからって笑うなよ、ラドビアス」

「笑いませんから、何です？」

エレンは下を向いてぼそぼそと応える。

「わたしが十八になつたら、一緒になると誓つた」

その言葉にラドビアスは、今度こそ本当に絶句した。

「笑われるのも嫌だけど、何も言われないなんてもつと酷い」

目を丸くして立ち尽くすラドビアスを睨み上げる彼女に、何と言つたらいいのか、答えが出ない。

その彼の首がいきなり引き寄せられる。 暖かいものが自分の唇に触れて。 それがエレンの唇だと気づくと、ラドビアスの中で何かが動き出す。 一旦離れた彼女の肩に手を回して顔を近づけると、エレンはそつと目を閉じる。

ああ、わたしは、やはりこの人を愛している。

愛している。 それで満たされた感情に彼は我を忘れて、エレンに深く口づけた。 思い出したのではない。 だが、自分の存在すべてが彼女を求めていた。 こうなる運命だったのだと確信する思い。

いや、願望か。

願望。 その言葉にラドビアスは背中を冷たいもので撫でられたよつこぞくりとした。

何度も交わす口付けに酔つていたエレンは、急にぴたりとラドビアスが口付けを止めたのを不満顔に見あげる。

「なんだ、急に」

気まずい雰囲気が立ち込めて、エレンが突き飛ばすよつてラドビアスから離れる。

「なんで、みんな忘れてしまうんだ。 ラドビアスのばか」

ハつ当たりのように音を立てて閉まる扉を見つめてラドビアスは、呆然としていた。

願望という言葉が、なぜか頭から離れないのだ。 何か、その言葉に記憶の鍵があるのは間違いない。 でも、それを暴いて、もしその記憶が思い出さないほうがいいと思うものだつたらどうする。 そのまま、エレンと共に生きて行くほうがいいのではないかのか。 彼女を愛している。 その事だけは真実なのだと分つているのに。 だが、一寸浮かんだ思いは無くならない。 「亡くした記憶。 そ

の真実はどうだったのかとこいつこと。思い出せば全て終わってしまつ……そんな予感がするのに突き止めずにはいられない。

エレンとの氣まずい空氣の中で、ラドビアスは恐るべき速さで仕事を片付けていく。仕事に没頭していると安心していられた。昼食になつて意を決したようにラドビアスは立ち上がり、ある場所を目指す。

始まりの場所へ。

そんなに広くない屋敷の庭の片隅にそれはあった。だいたい、どこに比べて広くないと定かじやない。それなりに大きい庭だとは思う。庭師も通りの年寄りだけになつて、最低限の仕事しかしていないので、秋を迎えた庭は、落ち葉でうめつくされていた。

その鮮やかとはいえない黄ばんだ落ち葉を踏みしめた時、ラドビアスの頭の隅で何かチリリとよぎる。

噴水のある水場につくと、心を急かされるような感情に支配された。自分は何か、他に重要な事をしていたのではないか。どうすれば思い出せるのか分らないままにその水の中に手を差し入れた。途端に、雷に打たれたような痺れが手から全身に回つてラドビアスの記憶は、蘇る。彼が危惧したとおり、それは、今の彼にとって嬉しいことでは 無かつた。

「ラドビアス」

そこにかかる、高い可愛らしい声。振り向くとそこには妹のシャロンが立っていた。

「また、ここにいたの？ お姉さまが探していたわよ。ここは、わたくしだけのお気に入りの場所かと思つていたのに、あなたもそうだったの？」

「ええまあ。それより、エレンが探していたとは？」

姉の名前だけに反応する彼を拗ねた顔で見ながらシャロンが渋々用件を伝える。

「ラドビアスったら、わたしだつてあなたの事好きなの知つている

くせに。幼馴染なのはわたしだって一緒に。さつき、叔父様の息子のカイル様がお見えになつたのよ」

「わかりました。戻りましょう。それはそりと、わたしもシャロンのことは好きですよ」

「その好き、じゃないのに。もういいわ」

シャロンは不貞腐れたように横を向いてしまつた。

*

談話室に向かうと、エレンと楽しそうに話す、若者が目に入る。眩しいくらいの艶のあるシルバーブロンドの髪、澄んだ黒に近い青い瞳。何か言葉にならない感情に支配されて、ラドビアスは胸を押された。自分は、彼を知っている。それは、この世界の彼ではないが。なぜなら、初めて会つたという相手に、まだすがたを見ただけの相手に感じているこの感情は、嫉妬だからだ。お馴染みの感情。彼はこの世界のヴァイロンなのだ。

「戻つたか、ラドビアス。カイル、話すのは初めてかな？ 今家のことを任せているラドビアスだ」

「ああ、執事のルシチアンの息子だね。君がここを取り仕切つているの？ わたしも気になつて久しぶりに来てみたんだが、すごい有様だな。大丈夫なのか」

「わたしが至りませんで。申し訳ありません」

ラドビアスの謝罪に、エレンがカイルに慌てて釈明する。

「こいつが事務をし始めたのは、今年からだよ。今は立て直そつと二人で頑張つている途中なんだ」

「そうか、でもいつでもわたしが相談にのるよ。父上はあんまりあてにはしないほうがいいけど。わたしは、君のことも、シャロンの事も大事に思つてるんだから。大変なら、遠慮なく言つてくれよ。援助も含めて出来るだけのことはするから」

エレンの手を取つて語りかけるカイルの様子はとても誠実さに溢

れていて、ラドビアスは苦しくなつて顔を背けた。

分るのだ。理由なんてない。カイルが人間的に優れてい

る事を。エレンに好意を抱いている事を。そして、彼女を幸せに出来るだらう事も。彼がヴァイロンの「与し身ならば。

その後から、ラドビアスはそれこそ寝る間を惜しんで執務室に籠つて溜まつた書類と格闘した。一週間後、書類は綺麗に片付き、これからの展望も開ける状態に持つていけたと彼は、ほっとベンを置く。

あぐびを一つもらして、背伸びをすると自分の部屋に疲れた体をひきずりながら戻る。あれ以来、エレンとも事務的に話すだけになつたが、自分からは話しかけることは出来なかつた。記憶が蘇つてしまつた今となつては、これ以上踏み込むことは出来ない。ところが、ゆっくり戸を開けると、今まで考えていたその本人が部屋にいた。

「エレン」

「遅いじゃないか、もう少しで寝込むところだつた

「寝ても良かつたのに。どうしたんです？」

答える代わりにエレンは抱きついてきた。

「エレン？」

「なんでおまえは、あれきり何も言つてこないんだ」

「それは

「

それは、今の自分はここにいてはいけないから。あなたと愛し合つのは、違う自分なのだと分つてしまつたから。

言葉に出せないせつない気持ちでエレンを見つめると、するつと彼女の指がラドビアスの唇に触れる。

「口付けて、ラドビアス。いつものように」

思い出してしまうと、彼女の言葉は魔法のよつにラドビアスの思考を奪う。彼の愛した人の顔で、声でそんな事を言われてしまうと……。

この人は、カルラではない。 分ついていても手が止まらない。
他の人の事を想いながら抱くなんて不実なことだと分っている。
それでも、ただ嬉しくてたまらない。

折れるほど抱きしめると、痛いと言いながらも彼女の手にも力が
入る。 そのままもつれるように一人は寝台に倒れこんだ。

「愛してる、ねえラドビアス。 名前を呼んで」

何度も交わす口付けの後、首筋に顔をうずめていた、ラドビアス
にかかる言葉。 それは、魔法が一瞬に解ける呪文になつた。

「エレン、すまない。わたしは何て事を」

「ラドビアス？」

そのまま、ラドビスは避けるように立ち上がると、外に飛び出して
行つた。

背中に、すまないってなんだよという言葉が小さく聞こえた。

乾いた落ち葉が踏みしめるつむぎに湿った音になる。 皿の前には、
噴水が水を静かに垂らしている。 ラドビアスは、この後に及んで
斜め後ろを振り返つた。 そこは、屋敷のある方向。 願望が叶つ
たと喜ぶべきだったのか。

自分を呼ぶ声に応えれば良かったのか。

でも、自分が愛しているのはカルラなのだ。 似た人では我慢で
きない。 なんて自分は強欲なのか。 あの口付けも何もカルラに
捧げたいもの。 それでなければ満足できない。

「わたしは、幸せになれない性格なのかも」

苦笑いをしながら、ためらいもなく彼は水の中に身を沈めた。

*

「ラドビアス、寝てんの？」

体を揺すられてラドビアスが目を開けると、クロードの顔が間近
にあつた。

「待ちきれなくて探しに来たら、ラジビアス寝てるんだもん」

「クロードさま、すみません。どのくらい経ったんでしょ？」

「うーんとクロードは、どのくらいだっけ？ と横の魔獸に話しか

けながら首を捻る。

「半刻くらいか、それより少し短いくらいかな。それより水場なんてないよな」

クロードの言葉にラジビアスも辺りを見回すが、周りは同じような広葉樹ばかり。

「わたしとした事が聞き違ひだったんでしょうか。夢を見ていたんですよ」

「夢？」

ええ、とラジビアスが笑う。

「どんな夢？」

「嬉しい、悲しい夢でした。でもクロードさまも出てきましたよ」

「どんなだった？」

聞かなければ良かつたとクロードは思つことになるが、全ては後の祭り。

「クロードさまが可愛いドレスすがたで、わたしのことが好きだと仰つてました」

ラジビアスの言葉に、ザエと大声を上げてクロードは彼から飛びのぐ。

「お、おれが？ ラジビアスに？ す、好きってぇ？」

はいとニヤリと笑うラジビアスに、クロードは恐る恐る聞く。

「で、おまえは何と言つたの？」

「はい、わたしも好きですと応えましたよ」

ケロリと言つたラジビアスにクロードは、青くなつた。

「夢の話だよな」

「勿論」

横で笑い転げている魔獸に、じらりと雷を落としてクロードは、

ぶつぶつ言しながら元の道へと帰る。

「クローデーさん」

「何?」

「とてもお可愛かったです」

「うるさい。勝手におれのドレスすがたなんて見るなよ」

「仕方ありません、夢なんですか?」

ラディアスは、そう言つてクローデーの後に続く。

彼の懷にある、小さい水筒がぽちゅりと水音を立てた。

10 いるか、いないか（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっておつます。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」 その後「イーヴアルアイ」

ラドビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」 その後、「ラドビアス」

(十)

人でない何かの存在を感じる。

身边に、いつもいつも。

もしかしたら、自分もすでに人ではないのかも知れない。

「妖精つて信じる？」

「妖精ですか？」

「そう」

真面目な顔で見あげる年若い主人の問いに、ラドビアスは怪訝な顔をして見返す。

「いませんね」

「いないの？」

いかにもがっくりといった風情に含み笑いを漏らすが、しつかりと主人に聞かれてしまったようだ。不満そうな声が即座に返る。「なんだよ、いるかも知れないじゃないか。どうしていないと断言できるんだよ」

「何をそんなお伽話みたいな事を仰っているんですか。花の妖精、草、木、風、そんな物がそこらじゅうにいるとしたら煩くて大変です。一体なんでそんな事を考え付いたんです、クロードさま」

「だつて、今そこに寝そべっている奴らだつて、まさに異形の物じやないか。魔獣がこの世に存在するなら、妖精だつていたつていいだろう。なあ、おまえたち」

クロードの言葉に赤い大きな翼を持つ魔獣は、はつはつと舌を出

して尻尾を振る。その横のドラゴンは、軽く後ろ足の鉤爪で頭の後ろをぼりぼりと搔いてまた丸くなつた。その反応にまたもむくれる。

「なんだよ、おまえたちまでおれをばかにしてん?」

「ちえつとクロードは、ふくれて立ち上がると雑木林の中へ足を踏み出す。

「どこへ行かれます?」

「すぐ戻つてくる」

ざくざくと音をわざと立てて歩いていく少年の後姿に、ラドビアスはやれやれと肩を竦めて寝そべつている一つの塊に向かつて低く言つ。

「クロードさまについて行け。悟られぬようこ」

返事を返す間も無く、一頭はすがたを消した。

「何だよ」

田の前に伸びている野葡萄の蔓にさえ、文句を言いながらガサガサと枝を搔き分けてクロードは歩いていた。別に目的があるわけでは無い。だいたい、クロードにしても妖精が本当にいるなんて考えていたわけではない。自分やラドビアスが、あるいは魔獣がそうであるように。何か、人の範疇では捕らえきれないものがいたらと。そう、自分たちが異端の存在だと感じるからこそ、そんな物がこの世には珍しくもなくいるんだつたら。そう思ひたかったのだ。

「ちえつ」

手に持つていた棒切れを滅茶苦茶に振り回す。周りの木々に当たつてぼきぼきと音がする。その音さえ、いまいましく思つてクロードは思い切りよく放り投げた。

「痛つ」

その声に、ごめんと反射的に謝つたクロードは、言つた後に自分の周りを見回すが何もない。一つ先の大木の上をリスが逃げる

ようになに走つていいくだけだ。 今の声は誰が？

「リ、リスじゃないよな」

上を見ていたクロードに後ろから、ぐるると低い唸り声が注意を即すように聞こえる。

「アウントウエン、サウンティトウーダおまえたち来てたの？」
さらに黒い鱗に覆われた前足がクロードの足元を軽く叩く。

「何？ サウンティトウーダ？」

足元に田をやつたクロードは、そのまま動けなくなる。 クロードの足元にある、いや、倒れている物は 何だ？

初めは、巨大な蝶かと思った。 または、緑の虫。 だが、ガラス細工のような透き通った羽がついている体はむしろ人に近い。まさかと思いながらもクロードはしゃがんで、その緑のものをそおつと手に持つて立ち上がった。

壊れるんじゃないかと恐々触ったのだが、以外にもそれ、はしつかりとしている。 あくまでも透き通る緑の羽は、陽の光を受けて、きらきらと多彩な色をのせる。

「おれ、夢見てるのかな？」 びつ弾ひ

問われて、赤い魔獣はクロードの手の中の物に鼻先を近づけてくんくん匂つた。 そして、顔を上げるとふつふつと息を吐く。

「分んないよ、それじゃあ」

クロードは、それ、を手にのせたままどうしようかと途方にくれる。 でもここに放つていくわけにはいかないよな。 おれのせいだし。 そう思つてそつと人差し指で頭らしきものを撫でてみる。

「う、ううん」

緑の生き物は、その刺激に気がついたように声を出した。

「だ、大丈夫？」

言葉が通じるのかなんて、この時は考えもしない。 それほど驚いていたから。

「いきなり、でかい丸太が飛んできて……あなたが助けてくれたの？」

「でかい丸太？」

普通に丸太を思い浮かべているクロードは、サウンティトウーダが地面から先ほど彼が投げた棒切れを咥えて見せた。

「ああ、それか。それで大丈夫、怪我はない？」

大丈夫と頭をふるふると振つて。それ、はクロードの手の上に立ち上がる。縁の触覚のような一本の長い髪みたいなものがゆらり、と揺れた。

「助けてくれてありがとう。あたしは、ラシュエンダ。あなたは？」

「おれは、クロード。実は、あの棒は……」

ラシュエンダと名乗った物はひらひらと、クロードの周りを飛び回つて、彼の鼻先で空中に止まる。

「あたしを助けたつて事は大変な事なのよ」

「え？」

大変の意味が分らず、クロードはラシュエンダの言葉の続きを待つ。

「妖精の森にご招待よ」

ラシュエンダが笑い声で言つのを途中まで畳然と聞いていたが。

「ちょ、ちょっと待つてよ。おれは行かないし、だいたい助けたんじゃなくておれは……」

眩しい光が、クロードと魔獣たちを囲む。あまりの眩しさに目を閉じたクロードは次の瞬間、どさりと地面に投げ落とされた。

「いたた。アウントゥーン、サウンティトゥーダいる？」

二頭が小さく吼えたのを確認してゆっくりとクロードは、頭をめぐらせる。

「ええと、さつきの景色とそれほど変わったよには見えないけど、そのほうがいいに決まっているのに、何か驚いて損をしたと思つて、いる自分を持て余しながら、クロードはぶつぶつ文句を言つ。

「だつてさつきと同じ場所だもん」

そんな声に、抗議しようと後ろを向いたクロードのまん前にいた

のは、縁の透き通った髪の少女だつた。顔は、蝶のよづて白い。縁の透ける膝までの布を体に幾重にも重ねて着ている。裸足の足が日にまぶしきくらいくらい白い。

「で、君だれ？」

「ラシュエンダって言わなかつたかしら？」

「ラ、ラシュエンダってあの小つこい虫みたいな？」

「虫は余計よ。変わつたのはあなたの目よ。妖精の本当のすがたが見えるようにしたのよ」

「へ、へええ」

「ついて来て、クローデ」

「嫌だ」

「いやー」

ラシュエンダは、思つてもみなかつた少年の返事に驚く。今まで妖精に会わせてやると言つたら、みんなほいほいとついて来たのに。こういう場合ははどうしたらいいの？　おばあちゃん。彼女は心中で助けを呼ぶ。

「妖精と会えるのよ。それに、妖精の宝物を見せてあげるわ。ね？」

「別に。妖精なら、今君を見たからいいよ。宝物も別に興味ない。おれ人を待たせているし、じゃあね」

「待つて、えつと。とにかく待つて」

ためらいもなく元来た道を帰ろうとする少年に、すっかり調子を狂わされてラシュエンダは、クローデの手を掴んだ。

「ねえ、お願ひ。来てくれないとあたし、村のみんなに怒られるのよ

「怒られる？」

「そうそう、そのなのよ。みんなしてあたしを打つわ。あなたのせいよ

泣き落とし、果ては脅迫と、ラシュエンダは必死で言葉をつなぐ。

その甲斐あつてクロードが肩を落として彼女の方へ向く。

「ちょっと行くだけだ。長居はしないよ

「うん、うんそれでいいわ」

どんな手を使つたって、人間がその気にさえなればいいのだ。

ラシュエンダは、ほつと胸を撫で下ろした。

だが、ラシュエンダに手を引かれて歩き出したクロードに、一頭の魔獣が前に回りこんで行く手を阻む。

「どうした？　ちょっと行くだけだ。勿論おまえたちもおいで」

「ええ？　この獰猛な生き物も行くの？」

「獰猛？　ぜんぜん怖くないよ。こいつらが行かないなら、おれも行かないけど」

クロードの隣で、威嚇するように大きな口を開けている魔獣。それのどじが、獰猛じやないのよと思ひながらもラシュエンダは、笑つて見えるように口を精一杯横に広げた。

*

何の変哲も無い森を歩いて行くと、いきなり視界が開けた。そこにあるのは、片田舎らしい村の風景。だが、クロードが村の入り口に足を踏み入れた途端、わらわらと村人が集まってたちまち囲まれる。

「よくやつた、ラシュエンダ。少年じゃないか、上出来だ」

口々にラシュエンダを褒めながら、クロードはどんどん村の中に歩かされていく。その最奥に、周りとは一線を画す、鐘楼を持つ古い建物がそびえていた。

「ここは？」

「妖精王の住まう城よ

「ふーん」

分厚い扉が音も無く開く。中に入るとわずかにかび臭い匂いがした。階段を上つていくと、赤いビロードのカーテンが豪華に彩る広間に通される。赤い色と金の刺繡。その広間にある大きな

椅子にゅつたりと座つている男が、笑いながらクロードを手招く。

「おや、活きのいい男の子だね。」ちらへおいで。わしの宝を見せてやろう」

「それ見たら帰れるんだよね。おれ急いでるんで早くしてよ」

あまりの言い草にこめかみに筋をたてるが、なんとか城主は笑顔を崩さない事に成功する。

「ほら、これだ。君の未来が見える鏡だ」

一抱えもある古い青銅製の鏡を、城主は少年の目の前に突き出して見せる。

「……じゃあ宝も見たし、おれ帰るね」

ところが、思つてもみなかつた少年の反応に、城主はおろか、そこにいた者すべてが啞然と口を開けた。

「見たのか？ しつかり見る」

「見たけど。だから？」

城主は、驚いた表情を貼り付けたまま、少年を通り越して、ラシュエンダに視線を移す。

「おまえ、人間を連れて来たんだろうな」

「え？ あ、はい」

そう応えた後にラシュエンダは、クロードを盗み見る。

「おまえ、自分の未来を見て何も思わないのか。後ろにいるのは何だ？」

城主の声に応えて出てきた異形の物に、城の中は大騒ぎになる。

「これは、魔獣じゃないかつ。魔獣なんかを持つていて奴が人間なわけがないだろう。おまえ何者だ」

指を突き付けられて、クロードは首をかしげながら応える。

「おれは魔道師だけど、一応人間じやないの？」

「 魔道師」

ラシュエンダが絶句して後ろによろよろと下がる。

「そんな性質の悪い者を連れてきてしまったなんて」

「どうしたこと？」

「わしらは、人間を連れてきてその鏡で正氣を失わせた後、夢とか過去の出来事を頂いておるのだ。からっぽになつた人はやがてすがたを変えてこここの住人になる。久しぶりの食事だと思つたのに。

魔導師だったとは」

「騙してここに連れ込んでおきながら、なんか酷い言われ方だよな」「何よ、魔導師もあたしたちも同じようなもんよ

「どこがだよ」

「人を騙して操るところよ」

ラシュエンダがさも嫌そうに言うのを見て、クロードは噴出す。

「自分たちが、性質が悪いって宣言してるなんてさ。しかし妖精がこんなに性悪だつたとはおれも残念だよ。じゃあ、帰るね

「だめだ」

クロードの背中に城主が低く言つた。

「秘密を知つた者を返すわけにはいかん。死んでもらう」

大勢の虫。ざわざわとその羽ばたきの音が城の中にまで聞こえる。クロードは、はあとため息をついた。

「アウントウエン、サウンティトウーダ、好きにやつてよし」

クロードの声が終わらないうちに、広間は阿鼻叫喚に包まれる。逃げ出そうとする妖精たちが折り重なつて倒れる。その頭を左右に引きちぎりながら魔獣は、広間を横断すると窓を突き破つて外に飛び出した。

「や、やめてくれ。帰つていいから。いや、もうどうぞ帰つてくれさい」

城主の懇願にクロードはにまりと笑つて、元は窓だつた穴から外に顔を出す。

「おまえたち、もういいぞ。帰ろ」

窓から飛び降りたクロードを背中で受け止めたアウントウエンが、不味そうに口から透明な羽を吐き出した。折り重なる死体の山。遊びで食いちぎられた頭が転がる。

それを恐る恐る物陰から見送る妖精たちは、一度と魔導師には手

を出でないと誓つた。

「それで、こんなに遅くなつたと？」

クロードの前で腕を組んで難しい顔をしている青年は、ふんと鼻から息を出す。

「だつて本当だもん。なあ」

クロードが助けを求めるように魔獣を見たが、一頭の魔獣は気持ち良さそうに丸まつていて知らん顔だ。

「だつて、じゃありません。妖精のせいにして今日をぼった酔に、明日は一日魔方陣の勉強ですからね」

「ええっ、じゃあせめて印の練習にして」

「ダメです」

ひいいと弱音を吐いてクロードはしょんぼりと一番星が出た空を見上げた。

「妖精なんて大嫌いだ」

「なんですか？」

「なんでもない。妖精なんか、いなくていいよ」

「だから言いましたでしょ？　妖精なんていません」

「まったく同感」

素直なクロードの言葉にラビニアスは、ちらりと笑つた。

「げふっ」

サウンティトウーダが満足そうにゲップをして、その拍子に口からバラバラと何かが落ちる。

それは、ガラス細工のような綺麗な羽

だつた。

11 牙を剥ぐ花（前書き）

今回は、ちょっと大人風味となつております。
ご了承ください。

ベオーク自治国の過去のお話です。

「レイモンドール綺譚」の外伝です。
一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっています。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」その後「イーザルアイ」
ラドビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」その後、「ラドビアス」

(十一)

綺麗な花には棘がある。

棘どころか、鋭い牙を持つている 知らない内にそれはしつかりと首すじに突き立てられているのだ。

「ねえ、インダラ。カルラがどこにいるか、知ってる？」

「いいえ」

部屋に入るやいなや、カルラの居場所を尋ねてくる主人にインダラは苦笑いを浮かべた。

「最近、逃げまくっているからな。なかなか会えなくてさ」
すらりとした長い足を長椅子に投げ出すようにインダラの主人、バサラは身を椅子に沈める。先ほど曇日中からカルラの母アーラとの情事を楽しんでいた。その名残の色香を体に纏わせながら物憂げにインダラを見つめる。

「今までアーラさまとお会いになつてたのに、もうカルラさまの事ですか？」

「ふん、別にカルラと寝ようとしてるわけじゃないんだからいいだろ？　だいたい、カルラはまだ子供じゃないか。子供に手を出すほどにこれら性がないと思つてているんじゃないだろうな、インダラ」

憤慨したようにバサラは、顔を背ける。

「どうですかね。アーラさまは、主の子供が欲しいと仰っています。このところ、他の方の寝所からのお誘いを断つてますよ」
知つてゐる、そう言ってバサラは綺麗な顔を顰めて上半身を起こす。

「そういうの、困るんだよな。他の兄たちの不興を買つのは避けたいからな。だいたい、わたしの子供はカルラに産んでもらう事に決めてるんだし。カルラが大人になるまでの遊びだと思つていてるのに煩いことだ」

長い亞麻色の髪を搔き揚げながら、ため息をつく主人の色香に、インダラは大きくため息をついた。

「嫌なら、だれかれ構わず、その過剰な色氣を振りまくのをやめてください。そんなだから、相手をする女たちが誤解するんですよ。で、探せばいいんですか、カルラさまの居場所を」

「うん、そうしてくれ。それで、しばらくアーラから誘われても寝所へは行かない。上手く断われよ。放つてある仕事を片付けなくちやあな。サンテラ一人に任せておくわけにもいかない」

「もつと早くその事に気づいて欲しいと思つてましたよ」

「うるさいよ、インダラ」

バサラは、言葉の割に笑顔のまま、軽く羽織つていた服を床に脱ぎ捨ててインダラに手を差し向ける。

「着替え、とつて」

「はいはい。ところで、どれが優先なんですか？」

「とりあえず着替え、かな」

バサラの執務室の机に積み重なる書類を前にサンテラは、今日何度も目かのため息をもらす。成人したバサラにも圧し掛かってくる書類仕事。眞面目にやつていたのは、初めの何年だつたろう。やれば、インダラや、サンテラ、ほかの次官など及ばないくらい迅速に仕事をするくせにバサラは、何かと出かけるいい訳を作つては仕事をさぼってしまう。そのお供にはインダラが付く事が多く、結局仕事はサンテラがやる事になる。

「少し休むか」

呴いて窓に目を向ける。晚秋の紅葉した中庭を挟んだ反対の回

廊に見えたすがたに笑みがこぼれる。奥の宮とこの回廊は近道になつてゐる。あまり知られていないせいか、見かけるのは見知つた顔だけだ。

「カルラさま」

毎日、書類仕事に籠つてもそのすがたが見えるだけで嬉しい。彼がため息をつくのは、窓を見た先に彼がいなさいだから。そんなに度々通るわけはないと思つてゐるのに、また、窓を見てはため息をついている。

濃い紫の胞を着て両手に大きな本を抱えて歩くその少年にサンテラは心を奪われていた。

十五歳になり、そろそろ子供の体から大人の体にならうとしている。本人の意向はともかく、それはどう見ても女性へと変わつていくように見えた。

少年　　と言つたが、サンテラの主人の一族は皆、成人するまで女性、男性どちらにもなり得るのだ。そして、カルラはバサラの望みどおり、このまま女性になるだらう。細い顎に華奢な肩の線。服に隠されている体つきもたぶん。

亜麻色の長い髪も、色素の薄い水色の瞳もバサラにとても似ている。同じ親を持つ兄弟だと分るそのすがた。以前は、兄のバサラをあれほど慕つていたカルラだつたが。十一歳のある晩、兄と母の情事の現場を見てしまつてから口をきくこともなくなつた。それは当然、サンテラとも会つことが無くなつたということでもある。

カルラは母親の宮から自分の荷物を引き払い、さつさと独立してしまう。数ある離宮の一つに居を構えて、長兄ビカラからの招へいにもまつたく応じようとななかつた。ベオークの一族にしては驚くほどの潔癖さにビカラもほとほと手を焼いている。

それは、ベオークの一族は血族内で婚姻関係を結ぶ必要があるから。カルラも成人したあかつきには、いやおう無く親、兄弟と関係を結ぶことになる。

サンテラの見ている前で珊瑚色の美しい衣装の女性がカルラの後ろから声をかける。亜麻色の髪を複雑にハオタイ風に結い上げている女性。背後にぴたりといるのは、しもべだろう。と、いうことは彼女はアニラなのか。しんとした回廊は思いのほか声が通り、中庭を挟んでいるのにこちらまで声が聞こえる。

「カルラ、待ちなさい。いつまでわたしたちを避けているの」

「つるさい、名前を呼ぶな」

「カルラさま、お言葉が過ぎますぞ。母君に向かつてそのようなしちもべの言葉に、振り返ったカルラが大きく手を振り上げてしまふの頬を殴りつけた。

「わたしに母親なんかいない。成人したらここを出て行くからな」「そうね、出ていけばいいわ」

小さく言ったアニラの言葉にカルラが物問い合わせに立ち止まる。

「バサラのこどもを産むのはわたしだけでいいわ」

「おまえなんか大嫌いだつ」

落とした本をそのままに、カルラは身を翻して走って行く。その目に光つたものは涙だったのだろうか。大変なところを見てしまつたという罪悪感とカルラへの憐憫の情にサンテラはしばらく何も手につかなかつた。

「どうします？ 主のカルラさまへの『執着はとつぐに分つていらつしゃるみたいですよ』

柱の影から成り行きを見ていたインダラとバサラは出て行く間合いを完全に失つていた。

「嫌だなあ。アニラのやつ。このままカルラとわたしの仲を邪魔されるのは堪らない。女の嫉妬つて怖い」

「一つ質問ですが

「何？」

「主とカルラさまの仲つて、邪魔するも何も何にもありませんけど」

「これからあるんだよ。その前に障害は取り除かなければね」

バサラの言葉にインダラは「ぐつと睡を飲み込む。　ああ、今主人はとても悪い顔をしている。

「今晚、アーラを私の寝所に呼んでよ、インダラ」

「いいんですか？」

「うん、今日はクビラと寝所を交換する。ねえ、クビラの事をアーラは何と言つてた？」

「変態だと言つておられましたね。寝所を共にするなんて絶対嫌だと」

「クビラにそのまま言つてやるわ。どうなるか、楽しみだな」

「ビカラさまが知つたら大変なことになりますよ」

「仕方ないじやない。クビラが殺つちゃつたんならさ」

その晩、カルラの母、そしてバサラの母親アーラは死んだ。

「痛ましいことだな」

伝えに来た魔道師にそう言つてバサラは、うーんと背伸びをした。

「朝は、花茶がいいなあ。ねえ、インダラ」

につこつと笑う主人に、インダラはわずかに寒気を感じて身を震わせた。この豪華な大輪の花は、血を吸つて生きているのだ。誰かの犠牲を糧にして生きている。棘よりももつと恐ろしいものを備えているのだと。

「花茶だなんて、誰かに見られたら大変ですよ。お祝いじやないんですねから。部屋を交換したのだって、どうこう風にビカラさまに説明する気です？」

「そつか、そこまでは考えてなかつた。おまえ、いい案は無い？」

ああ、自分もすでに喉元に主人の牙が食い込んでいるのだ。
インダラは薄く笑つた。では、もう仕方ない。自分は喜んで
この花に喰われることにしよう。

それは、カルラ十五歳の晩秋の出来事だった。
ルラはベオークから出奔する。

その二年後、力

12 名前（前書き）

「レイモンドール綺譚」の外伝です。

一話一話、独立した話になつております。

名前が今と変わっておつます。紛らわしくて申し訳ありません。

ユリウス・・ベオーク時代 「カルラ」 その後「イーヴアルアイ」

ラドビアス・・ベオーク時代 「サンテラ」 その後、「ラドビアス」

(十一)

昔の話をしよう。 大昔の話を。
今の話をしよう。
いつものように。

少年は、他の歳若い男たちと一緒に何時間も歩かされ、ようやく一つの建物に辿り着いた。 少年の生まれば、ここからそんなに地域的には遠くない農村。 この島国は、ほんの数十年前には荒廃が酷く、人は生きて行くのも困難な小国の集まりだった。

そこに、小国の一ツモンド国の中王、ヴァイロンが一人の魔道師と契約を交わし、島国を統一。 その魔道師による結界に守られた国のは歴史が始まった。

争いの無くなつた国は今、ゆっくりとすがたを変えようとしている。 だが、

「今年の麦は、少しも実らなかつた。 冬を越せるかどうか」
「貯えなど何も無いよ、あんた」

かさかさに乾いた手を振つて中年に差し掛かった女が、一つしかない板間に掛け布を取り合いつぶつに丸まつて寝ている二どもたちに目を移す。

「どうしよう、あんた」

まだ、そんな歳でも無いはずが、老年に差しかかろうとこうような容貌に変わつてゐる女。 それは、この国の暮らしの過酷をこころるものからか。 冬の四ヶ月ほどは、一步も外に出ることもままならないほど、この国の寒さは厳しい。 そのため、戦火にまみれて

いた日々が終わってもなかなか、國士を豊かにするに至らない。

國家が統一された恩恵など、こゝらの農民にとつては、まだまだ絵空事のようだつた。

「今日、いい話を隣村の魔道師さまから聞いたんだ」

「いい話？」

いい話だといいながらも、男は苦い顔を妻に向ける。話の不穏な様子に女は、男に先をねだることも出来ない。束の間、沈黙が流れる。

「「ジモを引き取つてくれるとこりがあるんだ」

「……あんた」

「売るんじゃない。魔道師になれば、ひもじい思いをする」とも無いんだそうだ。それに読み書きまで教えてくれるつていうじゃないか

女の引きつった顔を見なによつて、男はびつ良いか早口で先を続ける。

「上等なベベを着て、おらたちのように朝から晩まで働かなくともいいんだと。おらは、明日一番下のガルを連れて行こつと思つてゐる」「ガルを？ あんた、あの子はまだ七歳にもなつてないんだよ」

縋りつく女を乱暴に男は引き離す。

「だからだ。この冬をあいつは乗り越えることは出来ない。あんなひょろひょろで小さい体で何田も飢えるんだぞ。春になつたつて、あいつは畠仕事の一つも出来ない。娘なら、まだ奉公に出せるもんを」

「だ、だつて」

掛け布からはみ出さないよつて必至で兄や姉の間に潜つてゐる細い体を女は、呆然と眺める。この子が生まれてから、豊作だったことは無い。そのせいか、他の兄弟と違つて体は少しも大きくならない。病弱で手のかかるこども。そのくせ、ときどき大人が答えに詰まるような質問をする。男は、端からこの末っ子に疎ましいものを感じていたのかもしれない。

「魔道師さまが、試験をするらしい。それに合格したものだけが廟に召しだしてもらえる。そのときに支度金が出るらしい」

「あんた、それで」

「ばかやうう、金は必要だ。綺麗事じやないだらうが」
類を殴られて転がる音が板間に響く。その音に、寝た振りをしていた小さい体がびくりと震えた。

おらは、捨てられるんだ。はした金と引き換えに。
唇をかんで寝返りを打つ。かまどに細々と残つた薪がごとく、
と音を立てて落ちた。

コート山脈の麓の廟まで来て、やっと先頭にいた魔道師が止まる。
ここにじばらく待つように告げるとすがたを消した。

他からも連れてこられた少年たちが疲れきつて座り込んでいる。
冬が近づき、貧しさからこどもを廟に差し出す親が絶えないのだ。
その中の一人が話しかけてきた。

「ねえ、君いくつ？　ぼくはもうすぐ七歳なんだ。ねえ、お腹すかない？」

灰色の髪のくつりとした目の大きい少年がそう言ひながら隣に座る。

「つむれこ。おらは、なんにも持つてないぞ。あっちへ行け」「あはは、ぼくも何も持つてない。正直言うとお腹が痛いんだ」「お腹がいたい？」

相手の言葉に、驚いて相手のお腹に手をやると、ふいに手を掴まれて平衡を失つて倒れ込んだ。

「何するんだ？」

「ふふ……ひつかかつた」

圧し掛かつてこそばしてくるのに、慌てて体をよじる。だが、執拗に脇に触れる手に思わず笑いが漏れた。そのうちに、一人は大声を上げながら転げまわって遊んでいた。

「そこの二人、静かにしなさい」

現れた先ほどとは別の魔道師の声に、はつと我に帰る。さつと

元の場所に戻った少年がそつと声を出してくる。

「ぼくは、ルーカス・ランバーっていうんだ。君は？」

「お、おらはガルオネラ・ハントだ」

二人は、顔を見合わせてにっこりと笑つて手を振つた。

その後ガルオネラは、勉強をしながら、雑用をゴート山脈にある廟の一つでこなしていた。そんなある日、その小さな廟の廟主に呼ばれる。

「ガルオネラ、今日はわたしについてハンゲルの廟に行つてみるか」「ハンゲルの廟ですか、廟主さま」

あまりの嬉しさにガルオネラの声が上ずる。ハンゲル山は、このゴート山脈の山でも一番標高の高い所にある廟だ。高いのは、標高だけでは無い。この国の魔道教の総本山でもあり、魔道師の祖イーヴァルアイという大魔道師がいるところなのだ。話だけしか聞いた事のない場所に行けると聞いて、ガルオネラの顔に朱がさす。

それから、一日の道行きを経て、彼らはやつとハンゲル山に行き着いた。目の前にそびえる大きな巨岩に掘り込まれた廟にガルオネラは、ため息しかでない。

「これが……ハンゲルの廟」

「そうだよ、下で待つていなさい。手続きをしてくるから」

何の手続きなのか、分からぬまま、広い玄関の前に佇んでいると肩をこつんと叩かれる。

「ねえ、久しぶり。ガルオネラだつたよね、きみ」

振り返つた先には、あの灰色の髪の少年が悪戯っぽい瞳で笑つていた。

「ああ、きみはルーカス」

「あれ、言葉使いが変わつてゐる」

ルーカスという少年がにやりと笑う。

「あれから一年も月日がたつたんだから当然だろ。きみはなんの用

事でこの廟に来たの？」

「あれ、知らないの？ イーヴァルアイさまが、竜印という尊いものを授ける者を広く集めていらっしゃるんだ。わたしは、頭がいいから廟主さまに推薦を受けたんだ。きみもてつきりそうだと思ったけど」

「竜印？」

では、さつきの手続きとはそういう事だったのだろうかとガルオネラは、廟主の消えた場所を振り返る。

「ねえ、手続きつてまだまだ時間が掛かるみたいだし、探検しない？」

「探検？」

うん、とうなずいてルークアスは、手前の階段を上り始める。だめだと言つたが、彼は聞く耳を持たない。放つておけばいいものだが、どうしてもそれも出来ず、ガルオネラは、ルークアスの後を追つた。何回もくるくると螺旋状の階段を上がる。このままでっぴまで行くのかと心配だつたが、ようやくルークアスは、階段を離れて廊下に足を踏み出した。

「待てよ、ちょっと。もう帰ろう」

「ねえ、声がしない？」

「声？」

それこそ、見つかって怒られたら大変と、ガルオネラは周りを伺う。シンとした暗い廊下に確かに声がした。

「行つてみよう」

「だめだ、ルークアス」

ところが、またしてもルークアスは走り出し、ガルオネラはその後を追つた。奥の部屋から声がする。それは、泣いているような胸が締め付けられるような声。思わず、戸を開けると寝台の中から思いもかけず、硬い声が飛んだ。

「誰も入るなと言わなかつたかっ。すぐに出で行け」

「あ、あのすみません。どうしたんですか？ どこか、痛いんです

か？」

「こどもの声に、寝台をきしませてそこにいた人物が起き上がった。

「こども？ おまえ誰だ」

涙の後が頬に残つたままの顔。 だが、その美しさにガルオネラは、出ていくのも忘れて見入つてしまつた。 女の人 だと思つた。 そのくらい、細く、白い儂げな容貌の十六、七歳の少年。 魔道師に女性はないのだから、男の人なんだと思う。

「わたしは、ガルオネラ・ハント。 あつちは、ルーカス・ランバー

です。 どうしたんですか？ どこか、加減でも良くないんですか？」

自己紹介をすませると、二人の少年は寝台にいる少年のおでこや、背中をぺたぺたと触つた。

「こどりが痛いんです？」

「ど、どこつて。 む、胸が痛いといえば、痛いけど

「擦つてあげます」

「じゃあ、わたしはお茶を入れますね」

かいがいしく動くこどもたちに、少年は毒氣を抜かれて大人しく世話をされていた。

「起きりますか？ お茶が入りましたよ。 わたしね、お茶を入れるのが上手いらしいんです」

得意気に茶器を差し向けるこどもから、少年は茶器を受け取り口にする。

「……うん、上手いな。 ラドビアスには及ばないが、わたしの好きな濃さと香りだ」

「おまえ、名前は確かルークだつたな」

「はい」

「じゃあ、今日からルークにしろ。 おまえは、ガルオネラか。 では、ガリオールだ。 家族になんてもう会わないのだから、苗字は捨てろ

「ええ？」

いきなり、名前を変えさせられて一人のこどもは息を呑む。 その尊大な態度の少年が魔道師の祖イーヴァルアイだとその後、入つて

来た魔道師によつて告げられる。

「ただいま戻りました。イーヴァルアイさま」

現在、竜印を持った唯一の魔道師が竜門から姿を現す。そして部屋にいる者の顔を見回して眉を上げた。

「このこどもたちは誰です？ お付きの魔道師はどうに行つたんですか？」

「こっちの茶色頭は、ガリオール。灰色頭はルーク。おまえがつけた親父は、首にした」

「首に？ どうしてですか？」

自分が、首都のサイトスで王の執務にかかりきりになつてゐる間に、一体何があつたのか。 そう思つて主人を尙も見詰めると、彼の主人は仕方なさそうに言葉を継ぐ。

「あいつ、口が臭かつたんだ」

「それだけですか？」

「足も臭そだつた……な」

「イーヴァルアイさま」

つるさい、わたしが決めたんだからと、イーヴァルアイはあつさりとラドビアスに釈明する気を捨て去つて言葉を切つた。ふん、と言つて手を出す主人に心得た仕草で着替えを出そうとするが、灰色の髪のこどもが足早に衣裳部屋に向かつて行く。

「イーヴァルアイさま、昨日は群青のリボンだつたし、今日は臙脂えんじ色のシャツとリボンにしませんか」

頭だけこちらに向けて少年が聞いてくる。 そんな態度をと、咎めようとしたラドビアスの前で主人が腕を組みながらそれに答えた。「そうだな、でも浅い縁のもいいと思うけど」

「今日は断然、臙脂ですよ。まあ騙されたと思つて着てみません？」驚くような気安い言葉で、少年は臙脂色のシャツを広げて見せた。イーヴァルアイは、その様子に笑いながら応じる。

「分かつた、そうする。ガリオール、サイトスの宰相どのにおまえ

の草稿した租税についての論文を見せてやれ」

開いた口が閉まらないラドビアスの後ろにいた少年が、一礼をして部屋を出て行く。わずかの間に戻つてくると書類の束をラドビアスに手渡した。面白くない気持ちをいだきながら彼は書類を読むが。

「これをこのごどもが書いたのですか」

「ああ、こいつは使える奴になるぞ」

そう言って彼の主人は笑い声を立てた。

その後、何年かの後にラドビアスは、首都サイトスでの宰相の地位をガリオールに継がせてルークに「ゴートの廟長の座を与える。それから五百年の時が流れて 。

「きつとラドビアスさまは、わたしたちに主を取られたくなかつたんだよ。仲良しだったからなあ。わたしたち」「まさか。ばかな事を言つもんじや無い。何かお考えあつてのことだ。クロードさまの前で何を言つてる」

サイトスの王城魔道師庁の一室。ガリオールの執務室にいた、ガリオールとクロードの前に現れた灰色頭の青年魔道師は、絶対そうだと一人うなずいている。

「へえ、ユリウスに名前をつけてもらつたんだ。でも、前の名前に戻りたいとか思う?」

クロードの質問にいいえと答える声が二つ重なる。

「主にいただいた名前は、わたしにとつての宝でござります」「ガリオールの言つとおり。特にガリオールなんて、ガルオネラなんて酷い名前だつたんだからね」

「ルーク」

笑い転げるこの国の重鎮にガリオールは、厳しい声を上げる。

「おまえをサイトス出入り禁止にしてやる」

「ガルちゃん、厳しい」

つられて思わず笑うクロードにも忘れない、ガリオールの声。
「クロードさまは、明日から呪文のおさらいに巻物を一巻づつ、
し書きしてもらいます」

「ええ？」
「ガルちゃん、酷い」
「つるわい」
「あははは」
「クロードさま」

程なくイーグアルアイは死んだ。 結界は消え、竜印を受けていた魔道師はラドビアス以外すべて消えた。 そして今。

昔の話をしよう。 大昔の話を。
今の話をしよう。
いつものよつと。

(+II)

夢「ひみつ」とこつのは、起きているのだろうか。それとも寝ているのだろうか。

寝ている間、意識はどこへ行っているのだろう。

果てしない冒険の旅、あるいは、破天荒な時空の狭間へ。いつも帰つて来られるからといって今日はどうなのか。

うーんと寝返りを打つクロードは、自分の近くの話し声に気づいて薄目を開ける。一人部屋だったはずが、暗い室内には確かに大人らしい、落ち着いた声が聞こえていた。内容は所々聞こえないし、言つてていることも少し不自然なのが。

「最近私は、山ばかりで待たされて面白くないな。久しぶりに人間の肉でも食いに行きたいもんだ」

「それはいいが、見つかれば叱られるぞ。自分は、山で熊でも食つておこう」

「ふん、良い子ぶりやがつて。おまえ、人の肉なんて食つたことも無いんだろう」

「ばかなつ、あるに決まつてゐる」

明らかに場の雰囲気が殺氣だつてきて、クロードは止めよつと起き上がるつとする。ところが体は鉛のようにぴくりとも動かなかつた。金縛りというのはこの事だらうかと思いながら田だけは必死に声の方へ向けた。

「じゃあ、おまえは最後にいつ食べたんだ?」

「ベオークから来た、教皇の一族の一人を食つた。その時おまえもいたはずだ。あれは不味かつたな」

思い出したようにその声の主は、ぐえつといづ音を立てる。

「おまえはどうなんだ？」

「我か……」

その質問に答えるか否か、しばらく聞が空ぐ。

「我は、呼び出された主人には否応なく仕えるが。契約が終わる瞬間に気に入らない主人は食つてやることに決めてる。前もその前も食つたがな」

「食わなかつたことがあるのか？」

「……無い」

そこまで聞いていたクロードは、この語り合つ声が誰なのかが分かつて驚愕に目を見張つた。

「でも、食いたくなかった奴もいたにはいた」

ここに希望の光を見出したクロードの前で声は淡々と続く。

呼び出される時というのは、いつも体中が引きちぎれるような不快感に襲われる。 実際、魔界から経典の呪文によつて引きずり出されるのだが。

天井をぶち破つて降りてきた赤い魔獣は、勢いがつきすぎていたのか着地に失敗してしまつた。 なんという失態。 初めにがつんと格好いいところを見せて主人に見せ付けてやるうと思つていたのにと、苛つきながら顔を上げるとそこにいたのは子供だった。

「ガアウウウウウン」

思いつきり腹の底から脅かすように吼えてやると、少年は驚いてひっくり返る。 その様子があまりにも面白かつたので倒れている少年の頭を前足で小突いてやつた。

「やめろっ、アウントウエン」

子供特有の高い声が悲鳴のように聞こえる。 流石に呼び出した

主人にこれ以上乱暴もできず、魔獣は足を引っ込みで伏せの姿勢をさつさとると目を閉じた。

「おい、起きろよ。アウントゥエン。早くおきてよ。早くしなきや困るんだよ」

それを見て、慌てた様子の少年が必死に魔獣の背中を起こすように揺する。

「早くしないと、警備の誰かが来ちゃう。宝物殿から逃げなきゃならないのに」

と、いう事はここには、どこかの王宮か何かなのだろう。魔教典の在り処は、その時期によつていろんな所にある。前は南の国の王が所有していたが、はて、あれからいくらの時が経つたのか判然としない。時間の流れがこと魔界では違うのだ。

泣きそうな主人の懇願に仕方なくアウントゥエンは立ち上がる。

食いつの無いごどもだが今は主人だ。
問うように見ると、少年は緊張の面持ちで魔獣の耳元へ口を寄せようと爪先立ちする。

「僕をここから出してよ。このお城から、お願ひ」

そんな事かと魔獣は、鼻に皺を寄せると伏せをして、少年の方に顔を向けた。

「僕に乗れって言つてんの？」

あちこちの毛を引っ張られて辟易しながらも魔獣は、少年が魔獣の上でしつかりとしがみついたのを確認するまで辛抱強く待つていた。遠くからたくさんの中音が聞こえてくる。金属音がするということは、兵士なのだろう。

一つ確認するように小さく吼えると少年がぴたりと体を寄せるのを感じて、アウントゥエンは立ち上がったと同時に目の前の窓に向かつて飛び上がった。

ガラスの割れる音。ぱりぱりと木製の窓枠が壊れる音。それに気づいた兵士たちが宝物殿の扉を開けた時には、少年を乗せた魔獣は空に舞い上がっていた。

「セイリンをまつ、矢を放てつ、王子さま」とあの化け物を打ち落とす……」

その声の終わらないうちに顔を向けた魔獣が大きな口を開けた。語尾の代わりに飛び出しだのは、炎の中での叫び声だった。

「今のですごいね。おまえ火が出せるの？ 格好いいなあ」

背中の少年が感心したように呟くのが、ことのほか気分が良い。そこでもう一度空に向かって火を噴いてやると凄い凄いとはしゃぐ声が聞こえる。

そのままいくつもの山を越えてある山の麓に下りる。姿勢を低くして降りるよつに促すと少年は名残おしそうに魔獣の背中から降りた。

用はそれだけかと聞くように顔を向けると少年は、魔獣の首に腕を回してきた。その腕があまりにも細くてむげに振り払うこともできず、魔獣は黙つたまま少年の好きにさせていた。

「僕さ、男子のいない王に養子に来たんだ。元は王の一番下の弟子供でさ。父上に懇願されて一昨年王宮に来たのに」

泣き笑いの顔を魔獣の顔に擦り付けながら少年は先を続ける。王の娘と結婚して王位を継ぐことになつていたんだと寂しそうに。「今年になつて、一番目の后が男児を産んでさ。なんか途端に父上がよそよそしくなつたと思つたら、一歳を迎えた僕を排嫡するつて相談していたんだ。きっと僕は殺される。だけど、家にも帰れないよ。僕を匿つたりしたら本当のお父様もお母様も殺されてしまう。僕は、どこへ行けばいいんだろう？」

その後は、涙で言葉にならない。わんわんと泣く少年の頬をぺろりと舐め上げてやるといつそう大きな声で泣く。

「お母様に会いたいよお。お父様にお会いしたい

どこにも行けないと言いながら本心は自分の両親の元に帰りたいのだった。魔獣であるアウントウエンにはそこら辺の事はあいにく分からなかつたが、彼の要求は分かつた。

頭を振つて、縋りつく少年を引き剥がすと姿勢を低く取る。

「え？ どこに行くの？」

「おかあさまというところだ」

魔獣の言葉にびっくりした少年は、慌てて首を振る。

「だめだよ、僕が帰つたりしたら」

「おまえは行きたいのだろう？ おかあさまに？ 一度行つたらまた帰つてくればいい。気が済んだらどうする」

「お母様とお父様に逢えたら、僕は死んでもいいや。お礼に僕を食べてもいいよ」

「いいのか？」

「うん、一口で食べてね」

「分かつた」

ふつきつたように少年はそう言うと魔獣に跨つた。

少年のうろ覚えの道案内のおかげで随分と遠回りしながら、しかし確実に彼らは少年の生家に向かっていた。大きな峠の向こうに見える街並みに見覚えがあるのか、少年の声が弾む。

「いじだ、やつと着いたね、アウン」

正式な名称を言わないと普段は、無視しているものだ。魔獣を縛つているのは、魔獣の名前で契約した呪文なのだから。だが、今回はなんとなく少年が勝手に縮めて言つ名前が結構気に入つたりするのだ。何と言つてもこの子供ときたら、何もできない。兎も捕まえてやつて田の前に親切で放つてやつているのに叫び声を上げて逃げ出したりする奴なのだ。仕方なく犬歯を使って皮をはぎ、肉の塊にして炎で炙つてやると皿をさうに食べる。

悪いことにそれを眺めるのも悪くないと思つてゐる自分がいる。

「アウンがいないと怖くて寝られない」

そう言つもんだから、夜に狩にも行けない。大きな魔獣の首に手を回して眠る少年の体が冷えないよう長い尻尾をふわりと体に掛けでやると、少年は小さく身じろいだ。

宝物殿に忍び込むことは前からやつていたらしいが、そこで埋もれるようにあつた魔經典に目をつけて読み込むなど、並大抵の頭で

はないはずだ。腕力にはかなり難がありそうだが、おうさまといふ生き物は自分ではあまり戦わない生き物だったはずだ。なら、この少年のような頭がいい奴のほうが向いているのではないかとも思つ。

「おまえはおうさまにはならないのか？」

「前はなるんだと思つてたけど。今は僕は生きていたらいけない人間なんだ。アウン、死んだ証に僕の頭の骨と指に嵌めてる指輪を王様に届けて欲しいんだけど。そうしたら、お母様もお父様にも変な嫌疑はかかるないと思うんだ」

「おまえ、変わつてるな」

「そりかな」

「人はふつう、死ぬのを怖がつたり、嫌がつたりするもんだ」

魔獸の言葉に少年は泣きそうな顔で小さく笑つた。

「僕、だつて、怖いし嫌だけど。……仕方ないよ。こんな時代のこんな境遇に生まれてきたんだから。でも、最後に伝説の生き物と話せるなんてすごい経験もできたしね」

強がる少年の言葉を神妙に聴きながら魔獸はなぜかざわざわと心が落ち着かなかつた。明日になれば、契約が終わつてまた魔界に帰つてのんびり過ごすことができるといつのに。胸がずつしりと重くなるのはなぜなんだろう？

「ここしばらくなにも食つてないはずなのに」

何ヶ月も食べなくたつて腹はすぐが体調にそれほど響くわけはない。それが、おおきな魔獸を食べた後のように胃がもたれたようになり。それは、どんな理由なのかが分からぬ。分からぬが、今の主人との関わりに関係あるのではとは思つ。食べたいのかと聞かれれば、食べたくない。

「小さすぎて食いでが無いからだ」

口に出してみても自分ながら嘘くさい。そうは思つてもこんな感情になつたことの無い魔獸はそれを解消する術を知らなかつた。

あつと言つ間に、それこそ逃げるよう夜は駆け足で去つていく。

一睡も出来ずに少年の傍らにいたアウントウエンが体で庇おうとしても朝日は容赦なく少年の体を晒す。

「ううん、朝になつたの？」

「まだ寝てもいいぞ」

「だめだ、朝のうちに人が動き出す前に城に入ろう。行こうアウン主人に言われて逆らうこともできず、それでもノロノロと羽の毛繕いをしていると、再び少年に行こうと言わされて仕方なく少年を背中に乗せる。

城の尖塔に音もなく降り立つと、アウントウエンは大きな体に似合わない纖細さでそつと戸を開いた。

「ここから、朝お母様がお祈りにいく場所に直接行けるんだ。ここで待つていて」

「我も行こう。心配だ」

「大丈夫」

いきなり少年は大人になつたかのような顔でアウントウエンにうなずくと確かめるように階段を降りて行つた。

たいした時間では無かった。それなのにじりじりと胸を焼くこの気持ちはなんだろ。少年の安否を気遣うだけなのか。会いたいのか、会いたくないのかも判然としない。

会えば嬉しいのだと思う。だが　主人を食わねばならない。知らない振りをして帰つてしまおう。このまま逃げてしまおうか。魔界から離れてこの世界で生きていく。それもありなのかなとも思う。

「食べたくない」

「だめだよ、最後の命令はきかなくちゃ」

アウントウエンの言葉を聞きつけたように戻つて来た少年が小さく、でもきつぱりと言つた。

「おまえが戻す呪文を言えば、即座に食つて帰ることができるが、頭と指輪は持つて行けないぞ」

「大丈夫、言葉じゃなくて魔方陣にしたから。ここに持つているか

「う

ね？」と少年は笑つて見せた。

「これに僕の血をつければおまえの縛りは消える。ありがとう。僕のお願いを聞いてくれて。君は僕の最後の友達だよ。君の体の中で僕は生きていくんだ。いろんな時代に、いろんなところへ。君の血になつて肉となつて。ありがとうアウン」

抱きついてくる少年の涙を残らず舐め取るより口に舌を伸ばす。塩の味とともに感じる締め付けられるような思い。

「友達という名前もくれるのか。そういうえば、おまえの名前を聞いて無かつた」

「そうだね。僕、セイリンっていうんだ」「セイリン」

「そいつは食べたくなかつたな

「ふーん」

話が終わると同時にクロードは強烈な眠気に襲われて目を閉じた。聞きたいことが山ほどあるもの。

*

「起きてください、クロードさま」

「え？ 朝？」

昨日の晚のことが思い出されてクロードは急いで体を起こす。

「アウントウエンとサウンティトウーダは？」

「何言つてゐるんです？ 人に見られるとやっかいなのでもう山へ行かせておひりますよ

「じゃあ、やつぱりあれは魔獣たちなのかとクロードは差し出された着替えに袖を通してながら考える。

「あいつら、喋れるんじゃないかな。なんでおれには喋らないんだ？」

「 もうなんですか？」

「 気の無いようすでおざなりに返す「 デビアス」を一睨みしてクロードは、もつとすごい事に気づく。

「 あいつ、食べたくないって結局食ったんだよな。今までの主人で生きてた奴っていないつて…… いつも、やつぱり、夢だ、夢にしどこつ」

クロードは、窓に向かつて宣言する。

「 おれは不味いぞおつ」

夢の夢の時、意識はどこへ旅しているのか。

誰にも分からぬ。

分からぬから夢の夢なのだ。

一つ一つの間、過去へと記憶は帰ることがある。 懐かしい人に会いに。

14 反抗期（前書き）

レイモンドール国が出来て間も無い頃の話です。

(十四)

「どうしたらしいのか分からぬ」

あああとため息とも唸り声ともとれるような怪しい声。さつきから、この国の首都サイトスの王城内、魔導師庁の一室に響いていた。その声の主である灰色の頭の魔導師が、机に向かっていたこの国の宰相に背後からしな垂れかかる。

「何でも嫌つて、何？ ナンなの」

「は？」

来年の税収を見積もつていたガリオールは、いきなり数字の世界から、違う世界に引っ張り出されたようにきょとんと顔を振り上げるよう後に後ろを見た。

「何の話だ、ルーク」

あのさあと言いながらこの国の中古参の魔導師三人の内の一人、ルークがガリオールの机にどっかりと座る。

「おいつ、書類の上に座るなつ」

「離ちやんのことなんだけど」

「離ちやん？」

そつくりと聞き返すガリオールにルークはぶつぶつと文句を言つ。

「えつと、ヴァイロン国王からもらつた子供だよ。主がクロードつて名前をお付けになつたけど、小つちやくて可愛いから廟では、離ちゃんつて呼んでるんだよ」

「それが？」

「何言つても、嫌嫌つて言つてさあ。怒つていいかな」

国家規模の思考を中断させられて、相談を受けた内容にガリオー

ルは眉根を寄せた。

ほんの数十年前まで、この国は小さな貧しい領主国の集まりに過ぎなかつた。その一国の領主、ヴァイロン王が国を統一し、今に至る。しかし、彼は武力によつて国の統一をなしえたのでは無い。外国から来た一人の魔導師と、ある契約を結んだのだつた。

魔導師は、この国を魔術の結界で閉じて守る。その代償として

……。

国は魔導師を保護する。

王は、即位ごとに彼の子どもの一人を魔道側に引き渡す。そして、数年前に廟に連れてこられた王の子供はルークの手で養育されることになったのだが。

「最近、わたしの言うことなんてまるできかなくて」

それが第一反抗期だなんて、ここにいる誰も分からぬ。

「朝なんだけどさ、離ちゃんはいつもパン粥を食べてるんだけど。今日は、ふわふわで甘いパンが良かつたって駄々をこねるからさ。急ぎ用意させたら、もう要らないって」

「で?」この話の出口に不安を覚えながらガリオールが続きを促す。「ローブを着せようと付きの魔導師が手をかけたら、自分でやりたいつて言い出して」

「それは、いい事だ。成長の証ではないのか?」

違うつと言いながらルークがガリオールの額を弾く。

「まだ、上手く着れないんだよ、離ちゃんは。結局着れなくてローブを放り出して泣き出して、最後に言つには『ルークが悪い』だぜ。訳が分んないよ」

うーんとガリオールも額に手をやる。幼いとは言え、前は聞き分けが良かつたような気がする。言つてることに整合性が無いといつことは、何か頭が混乱する病氣にでも彼はかかってしまったのだろうか。

「それは、不味いな」

「だろ?」

「医者に見せるとして、おまえもすぐにハンゲルの廟に帰れ。クロードさまの看病をして差し上げなくては」

「じゃなくてわ」

ルークは大げさに両手を上げる。

「子供の世話は大変なんだよ。今日は仕事をわたしと替わってくれ、ガリオール」

「何? 今何と言つたんだ、ルーク」

「おまえがクロードの面倒をみてくれ、ガリオール」

唖然とするガリオールをよそにルークは、宰相の椅子からガリオールを追い出して満足そうに座るとそこにあつた書類をぱらぱらと捲つた。

なんでこんな展開に とガリオールは思つたが、クロードの様子を自分の目で見ておくのもいいかと思い直す。

「書類にいい加減な数字を書くなよ、ルーク。行つてくる」

ひらひらと手を振るルークにそう釘を刺してガリオールは竜門をくぐつた。

*

「イヤだあつ」

三歳か四歳くらいの幼子がひっくり返つて手足をばたつかせていた。燃えるような赤い髪が特徴のその少年を扱いかねて、魔導師が数人取り囲んでいる。

「クロードさま、お靴を履かないとお寒いですよ」

「ひながじぶんで、はきたかったのにい。もうくちゅなんてはかない」

「クロードさま、で、では、ご自分で履きください」

「もう、イヤだ。ルークがはかしてくれないと、くちゅははかない」

「えええ？」

「何を騒いでおられるんですか、クロードさま。靴ならわたしが履かして差し上げます。泣かずにお座り下さい」

龍門から出てきたガリオールが、騒ぎを止めようとしたやんわりしかる。

「おまえなんか、きらいだあ。ばか、ばか、ばか」

こきなりのバカ三連発に、手が出そうになるのをぐつと堪えてガリオールは、周りを取り囲んでいた魔導師を見る。魔導師になるとはいえ、この子供は王子なのだ。叩くわけにもいかない。

「クロードさまは、いつからこんな事になつた。なぜ、医者に診せないのだ？」

「医者でござりますか？　ええと、『ぐく最近でござります。さつやく医者を呼びます』

おたおたと走つて行く魔導師を厳しく見ながら、ガリオールは、そつといえぱルークに一日のお世話表なる物を預かつていていたと思ひ出す。

「これか……」

開いてみると、朝からのクロードの生活を追つて書かれたものらしかつた。そこで、今頃は何をしているのかと文面を指で追う。『朝の支度を済ませたら、食事。なるだけ本人のしたいようにさせる。終わつたら、お手洗いに行かせる。これは重要。今が大事なので忘れないように。いかなる時でも半刻に三回は、お手洗いに誘うこと』

半刻に三回とは、多いのではないか？　とガリオールは首を捻る。まさか、ここに病気の一端が現れているのではないかと思いながら、クロードを見た。

「クロードさま、お手洗いに行きましょうね

「いや」

「いや？」

もう一度ガリオールは、書き付けを捲る。ここに書いてあると

「いやだ、これが毎日繰り返されていふとこつ事ではないのだらうか？なぜ、いやなのが分らない。」

「クローデさま、お食事が終わつたら、いつもお手洗いに行かれているのではないですか？」

「いやよ」

「そうですか、では行きましょひ」

「いや」

「ふくつと頬を膨らませて嫌々と首を振るクローデ」「ガリオールはどう説得しようかと思案にくれる。

「お手洗いに行かないとお腹の具合が悪くなりますよ。まあ、行きましょひ」

「いやだつ、ばかつ」

「どこかで何かがぱつつりと切れた音がした　よひに感じた。

いや、ガリオールには、はつきり聞こえた。

「うえええんつ」

泣き叫ぶクローデを抱きかかえてガリオールは強行手段に出た。ずつと手洗い場に着くまでクローデは泣き続けて「ばか、ばか」と言い続けていた。

「はい、着きましたよ。わたしたちの手を煩わさないでください。おしつこしてください」

「いや」

「は？」

「いやだ」

泣きたくなつた。いや、少し泣いていたかもしけないとガリオールは思つた。

*

「それでこの話はどこに行きつくんだつ？ ルーク」
顔を真つ赤にしたリチャードが噛み付くようにルークに喰つてか

かる。

「ああ、Jの後は盛大にお漏らしをしたところ事で落りもつべ
涼しい顔でルークが口を閉じる。

「大昔の話を持ち出してどうする気なんだと言つてゐんだ」

「え？ 面白くなかった？」

ルークがしぬれつと応じる。

「そういえばあの後、わたしがサイトスに戻つたら、書類にてたら
めな数字が書き込まれていて、修正するのにえらく時間がかかつた。
まったく」

ガリオールがさつき、あつた事のように渋い顔を見せた。

「だけど、書類仕事と子育て、どつちが大変か分つただろう？」

「確かに」

納得の表情でガリオールは、ルークに頷いてリチャードを見る。
「おまえ、最悪だつたぞ。まあ病氣じゃ無かつたらしいが」
すぐに医者に診せた結果、「反抗期です」の一言だつたのを思い
出して、はあとガリオールはため息をつく。

かつてのクロード、今のリチャードは苟々しながら話が終わるの
を待つ。

「くちゅ、ぐらいで騒ぐなつてことだよね」

「ばかを一生分言われた氣がする」

「いい加減にしてくれつ。何をさせたいんだ？」

「察しがいいな、リチャード」

リチャードの言葉に、ガリオールが物分りが良くなつて良かつた
と頷く。

「今日一日、今の雛ちゃんの面倒みてくれ

ルークがにこやかに告げた。

(十五) 古い

その日は、クロードは朝からついてなかつた。

始まりは、野宿した洞窟内で水が漏れて、しかもそれはクロードの頭上だったことから。

そこで頭を洗おうと外に出たら、サウンティトウーダの尻尾を踏んでずつこけて鼻を擦りむいて。

「なんだよ、おまえ笑ってるんだ!」

鼻の上に皺を寄せたアウントウーンに因縁をつけてたら、盛大にクシャミをされて顔中べちゃべちゃ!。

「なんだよ、一体」

ぶつぶつと文句を言いながら川まで行くと、あつと音の間に発生した鉄砲水にクロードは体を攫われる。それは、まさに「あつ」という間の出来事で、ついていったアウントウーンもサウンティトウーダも髪の一つも動かせなかつた。

さつきまで、暖かい手が額に当てられていた。おれは夢を見ているのだろうか? 眠りの縁を漂つていたクロードの両手が、いつも傍らにいる魔獣の感触を探す。だが、荒い織り畳の敷布をなで擦るだけ。

「ラドビアス?」

畳を開けると古い天井板の無い吹き抜けの屋根の裏側がじかに見えた。顔を横に向けるとベニヤを重ねて强度をつけるように作つてある板壁に手づくりしたような机と椅子が置いてある。

「ここはどうだ?」

それに答える者もいないようで、クロードはため息をついて体を起こす。果物を入れていた木箱をつないだ物に板を置き、何枚かの敷布を敷いただけの硬い寝台を降りる。

ここが一体どこなのか調べるために、そこら辺を覗くと、机の中に見慣れた物が入っていた。

「これは、羊皮紙」

中を見ると、レーン文字が書かれている。大陸では、レーン文字はまつたく見かけないために、クロードはしばらくそれに見入っていた。

「なんでここにこんな物が」

「あんた、そこで何してる？」

いきなり、女の声がしてクロードは「ふえっ？」というわけの分からぬ声を上げる。

「それには触らないで欲しいんだけど。あたしの宝物なんだからさ」「宝物？ 羊皮紙が？」

声のしたほうに目を向けると、土色の長い髪をくるくると巻いて頭に高く結っている若い女。朝黒い顔だが、アーリア人の血が入っているようで美しい様子の女性。

「それは、あたしが見つけたんだ。あたしはここで占いとかやってる。そこに書いてあるのは、きっと昔の凄い魔法の呪文がなんかなんだよ、きっと」

女が手を出すと、つけている金属の細い腕輪がもシャラーンと音を立てた。耳にも大きな輪になつていて金の装身具がついている。それは、砂漠に近い地方の装束だった。砂漠に住む種族には、土地を定めず、移動する者が多い。水を求め、オアシスにつくと踊りや歌、博打など娯楽を提供して金をもうけてまた、次のオアシスに行く。

「あなたは、沙族の血を継いでいるんだね」

「良く知ってるね。そうだよ、あたしの父ちゃんが沙族だった。母ちゃんはアーリア系だつたらしいけど」

女に渡す前に、チラリとクロードは羊皮紙に目を通す。

「ねえ、それは多分たいした事は書いてないと思うけど」

「あんた、読めるのこれ？」

うんと頷くクロードの肩を勢い込んで女は掴む。

「痛いよ」「ああ、ごめん」

もう少し、見せてと滲んだインクの後を指でたどる。もう何百年も経っているのだろう。かなりセピア色に変色している上に、掠れていて読みにくい。

「名前らしきものが書いてある。ロレイン・キール……、それとキーリー・ランドルフ」

そこまで言つて、クロードは顔を上げた。

「キール・ランドルフ商会の創業者の名前じゃないかな。何で大陸屈指の貿易商がレーン文字なんか書いているんだ？」

レーン文字は、この世界で使つているのは、レイモンドールの魔導師たちだけだったはず。キール・ランドルフ商会といえば、知らぬ者はいないというほどの豪商だ。確かに元はレイモンドールの大陸の出先商として、大陸に進出したと聞いた。キールとランドルフという友人が共同経営して本家より、大きくした出世話として聞いたことがある。もう一百年ほど前の話だった。

「なんて書いてあるの？」

「名前が書いてある」

その先は、二人の名前の下に契約を示す魔方陣が描いてある。この一人が二人の間で何かの契約を交わした証明と言つたところか

「とにかく、術は、この二人にしか効力は無いし、個人的な事だと思つけど」

明らかに落胆の色を見せた女に、クロードは苦笑する。占いでは、この羊皮紙に書かれていることは分からぬのかと思つてくれりと笑つた。だが、クロードは魔導師しか知らないはずのレーン文字を使つていた、ロレインとキリアという商人に興味を抱く。そこに。

「クロードさま、一体そこで何をしていらっしゃるんですか」

窓が、がくんと大きな音とともに開けられて、見慣れた顔がクロードを怒ったように見降ろす。

「おれ、水に流されたんだよ。この人に助けられたんだ。窓壊すなよ、ラドビアス」

「今にも壊れそうなこんなところにいる方が危険です。早く出でください」

助けてもらつたお礼などうひやつて、ラドビアスはクロードに家を出るように言つた。

「ああ、そうそうおまえ、一百年前の事つて覚えてる?」

「一百年前ですか?」

女は、クロードの言葉に仰天した。この細つこい綺麗な少年は、頭がおかしいらしい。こんなに可愛いのに天は、やはり一物を与えないのだと女は思つ。

「一百年前? 事によります。わたしだつて全て覚えているなんて無理ですから」

おかしいのは、少年の連れもだつたと女は一度驚く。一百年前の事を聞く少年に真面目に答える男 かなりネジが緩んでる。

「キール・ランドルフ商会の創業者のこと」

「ああ」

聞いた途端にラドビアスは、大きく頷く。

「ロレインとキリアの事ですか」

「彼らは何者?」

「魔導師だつたんですよ。二人とも、中級魔導師で枢密使として、魔導師の不正を探索していました」

「魔導師が事業を起こしたの?」

「一人とも還俗したんですよ」

「記憶を消さないで?」

「あれは、ルークが勝手にやつたことです。普通は、中級以上の魔導師に還俗の許可はでませんが、出た場合は魔術の漏洩を防ぐため

に記憶を消します」

「ふうん、何があつたんだり?..」

「まあ、クロードさまはお知りにならなくてよろしくことです」ラドビアスの言ひ方にクロードはむつとして口を尖らせた。この体のせいでいつまでたつても自分は子供扱いかと思うと気が狂いそうだ。

「なんだよ、言えよ」

「魔導師も人間だと言つことです」

「……んなの分かつてゐるよ。当たり前じゃないか」

「あんたたち、何者なの?」

今まで黙つていた女が、たまらず声を上げる。

「何者だか占つてもらおつか」

ラドビアスが懐から金貨の入つた袋を取り出した。その様子のあまりの悪役つぶりにクロードは、嫌な話題を振つたんだなと感づいた。

「いいわよ、あんたにする? それともぼく?..」

ぼくと言われて、クロードは脣を曲げてそっぽを向いた。

「ほら、座つて。手を見せてよ、手相を見るわ」

大人しく座つたラドビアスの手を取つた女は、途方にくれるよう顔を上げた。

「どうかしたのか?」

しらじらしく聞くラドビアスに女は、「生命線が無いわ。あんた、とつくに死んでいるはずの人間つてことに」言つたあとに、ばかよねと引きついた笑いを浮かべながら机の引き出しを開ける。金貨をちらつかせている客を怒らすわけにはいかない。

机の上に何枚かカードを置いて、それを表に返してまたもや、女は固まつた。

「あんたに死神がついているんだけど。誰かに魂を掴まれていてるって」

ああ、あたしはお金を貰い損ねたと青くなつた女は、田の前の男

が笑つてゐるのに気づいて背筋が凍つた。その横にいた少年も笑いながら男の肩をつつく。

「あはははは、良く当たるなあ。お姉さんの占いの腕すげじよ。生命線無いつてさあ」

「笑いすぎですよ、クロードさま」

ラドビアスは、クロードに怒つた顔を見せて、金貨を一つ机に置いた。

「女、主人を助けてくれたそうだな。これはその礼だ、とつておけ」もう女は言葉も出さずに、カードを捲つて少年を見た。

「ひつ」そのカードには、少年が悪魔を連れていると出たのだ。

「どうしたの、お姉さん？」

「あ、あんた、悪魔使つてるの？」

その答えを聞きたいのか、聞きたくないのか女にはもう分らなかつた。ただ、体の震えが止まらない。

「うん、可愛いのを一頭ね。見せてあげようか？ お礼に」

その言葉に返事は帰つてこなかつた。女は失神していた。

「あのさあ、ラドビアス」

外に待たしてあつた魔獣に乗つて戻る道すがら、クロードは後ろからサウンティトウーダに乗つているラドビアスに声をかける。

「おれにだつて分るよ。キールとランドルフの関係くらい。おれだつてもう十七歳だぜ」

それに、あの羊皮紙には続きがあつた。

『ロレイン・キール、キリア・ランドルフ両名は、死が二人を分かつまで共にいることを誓つ』 そう書いてあつたのだ。それは、二人の愛の誓いの文章だと思つ。魔導師は男ばかりの世界なんだからそんなこともあるだろつ。

現に自分の兄だつたダリウスだつて、男としてユリウスを意識していた。ぼくは、女の子が好きだつたけどと思つてから、アリス

ローザの顔を思い浮かべて即座にクロードは落ち込んだ。

もう、分かれてから一年も経つ。きっと誰か好きな人ができたるつ。別れたときに十七歳、今はもう十九歳。男女に限らず、この年代は一年で姿が大きく変わっていく。

その中で取り残される自分。

「おれはいつまで経つても見かけは、十四歳なんだよな」

「クロードさま」

いつの間にか横に並んでいたラドビアスが、心配そうにクロードの背中に触れる。

「クロードさまも、そういう事に関心のあるお年頃という事ですか。そういう処理の仕方とか、ご存知で？」

「な、何言つてんの？」

何を言つているのかなんて、クロードには分つてゐけど、口に出して言つことなかよとクロードは、恐る恐る自分の従者を見た。「無礼な、我的主人は知つてゐる」

今まで黙つっていたクロードを乗せていた赤い狼が、ラドビアスに文句を言つよう声をあげた。

「こ、こらっ、何言つてつ」

顔が信じられないくらいに熱い。隣のサウンティトウーダまでがうんうん頷いている。

「さようでしたか。それではそのうち、花街にでも行きますか？」

顔色一つ変えないでラドビアスが言つた言葉にクロードは、消えたくなる。

「もう……勘弁してくれ」

今日は朝からクロードはついてなかつた。

一旦、自分たちが人間の言葉を喋ると知られた二頭は、言つて欲しくない場面を選んでいるかのようなタイミングで危ない発言をするのだ。

これなら、黙つてるときの方が良かつた。

主人の面目を保つたと大意張りの一頭に、何を言つてもムダだろ

う。

横でこつそり噴出す、ラドビアスに気がつかないふりでクロードは、自分が置いていったものを思い出していた。

そこに、大型の猛禽が姿を現した。

「これは、使い魔ですね」

「レイモンドールから来たみたいだけど」

やっかいそうな来訪者にクロードは眉を顰める。

そういえば、今日は朝からついていない日だった
と。

(十六)

」の道は正しい道に続いているのか。

だが、正しい道ではなくてもおれは進んで行く。

それが自分の決めた事だから。

「何ですか、それは」

手を出すラドビアスにクロードは、羊皮紙に戻つた使い魔を渡す。黙読していたラドビアスがつと、目をあげた。

「どうなさいます」

「そうだな、レイモンドールに戻る」

何かを言いかけて、ラドビアスは頭を振る。どうするか、聞いたのは自分で。主人は答えを出した。わたしに何が言える？

その手紙の内容は、レイモンドール国の中主であるクロードの双子の兄、クライブが叔父、コーラルにより殺されるかもしれない。レイモンドールは魔導師の国に逆に舵を取るように見受けられるという内容だった。

「王の正当な鍵を受けておられるクロードさまにお助けを請い願う所存です」そう結ばれていた。署名は、クロードの知らない名前だった。ダニアンと書かれている。

もう帰らないと思つた一年前。

まだ、自分は何も成し遂げてないというのに。

だけど、クライブを見殺しにはできない。自分が押し付けるよう^うに王座を彼に突きつけて国を出たのだから。不穏な空氣を感じ取つていたはずなのに。

おれは知らないふりで国を出てしまった。

ここで手を出して、また引っ搔き回していいものだらうか。もうレイモンドールは魔術とは、自分とは関わりの無い国になつたのに。部外者たるおれが。

部外者だと思つた途端に自分が一人で何もない空間に放り出されたような思いが胸に迫る。

「おれが行つてもいいものだらうか」

「クロードさまは、レイモンドール国をどうなさるおつもりだったのですか」

「どうするつもりつて……魔導師の支配しない国にしたいと思つておれは……」

「そうだ、おれはやり残したものがあつた。

「最後のけりをつけたかった」

ラドビアスは、何も言わずに魔獸の鞍に付けた鞆の中から厚手のマントを取り出す。それは、かれらがレイモンドールから出るときに身につけていたもの。

「あの国は寒いですからね」

肩からかけられたマントの重みに泣きそうになる。

「なあ、ラドビアス。おれはあの国が好きだ。だつておれが生まれた国だもの。俺の大事な人たちが住んでいる国なんだから。でも」「でも?」先を促すように相槌を打つてラドビアスがマントの留め金をかける。

「酷い事をするよ。でも目を瞑つていってくれ、おれのやりたいようにやらせてくれ」

懇願するように顔を上げた主人の瞳には涙が溜まつて今にも零れ

そうだった。

「はい、黙つております。田を瞑つておりますよ」

こんなにも脆く弱い心をさらけ出されて、どうして願いを聞き入れないわけがあるだろうか。

「わたしは、あなたの従者ですよ。好きにお使いください」

「うん」

クロードは涙を右手の甲で拭つて笑つた。

「泣き虫だよな。外見がガキだと、中身まで成長しないものなのかもしれないな」

それはラドビアスの返事を待つている言葉ではないのだと彼はただ黙つたまま、魔獣を手招く。

「行こう、レイモンドールへ」

「はい、クロードさま」

一人はこの一年の時を魔獣の背に乗つて遡つていいくようだった。急ぐためにかなり上空を飛んでいるためにマントがありがたかった。

「何度か魔獣を休ませますので降りてよろしいですか」

「うん、任すよ」

砂漠近くのダルファンを過ぎれば、やつと入国したハオタイ国から出て行くことになる。ラドビアスの故郷だった土地。

そしてだんだんと馴染んでいた西側の建物が姿を現す。密に茂る森を見つけて降り立つたクロードは、羊皮紙に書いてあつたダニアンという人物をラドビアスに尋ねる。

「なあ、ダニアンっていう魔導師を知ってるか?」

「ええ、モンド州のお隣、クロードさまもご存知のボルチモア州の州宰代理だった男かと」

「ボルチモアの?」

じゃあ、一回くらいは会っていたのかもしれないが、クロードは

全然記憶に無かつた。

「上級魔導師だつた？」

「いいえ、ですが彼の腕は確かだつたと思いますよ」

クロードが知つていた魔導師はほんの一握りでしかも、魔導師の中では天井人のような位の高い者ばかりだつた。中級魔導師など覚えてもいない。だが、ダニアンという魔導師は、自分の名前を追つてここまで使い魔を飛ばせるほどの魔術を使えるということだ。ユリウスこと、魔導師の祖であるイーヴァルアイが死んで上級魔導師は「一ラル以外全て死んだのだから。

そのこともクロードに責任がある。おれがイーヴァルアイを殺したのだから。

「いけませんよ」

ラドビアスが悪戯を見つけたようにクロードに顔を向ける。

「何？」

「イーヴァルアイさまは御自分で死を選ばれたのです。クロードさま、何もかも自分のせいにするのはいけません。それはひどく甘美な罷なんですよ」

彼の言葉にクロードはどきりとする。

甘美な罷。

閉じこもつてしまいたくなる。甘えていたくなる。どうせ、あれはと体を丸めて。そうだ、何もかも自分のせいにして前に進まないでいるのは楽だ。

自分の殻の中でじじいじと考えて答える無い世界に漂う快感。おれは不幸だと大手を振るいたい自分が騒ぎ出している。

「そうだな、あれはイーヴァルアイの、ユリウスの決めたことだつた」

主人の目に光が戻つてラドビアスは気づかれないようにほつと安堵のため息をつく。

仕方がないくらい、クロードの運命は過酷だつた。庶子扱いで孤独だつた幼い頃。無理やり永遠の命と引き換えに魔導師のしも

べにされてた十四歳の少年が辿ったのは、そのまま歳を取らない体と、殺戮の日々。そして、愛する者との別れ。彼が兄として、魔術の師として慕っていた者を彼は本意では無いながら、その手で殺さなくてはならなかつた。

そして、国の転覆を図つた反逆の徒として國から追われる立場になつた。

「それを、わたしは甘えるな」 そう言つのだ。

それに彼は、分かつたと。 そう思える。痛々しいほど前向きで悲しい人だとラドビアスは苦しく思つ。 彼はまだ十七歳だというのに、彼を待つ運命はかれを歳相応な弱音を吐く事も許しはしない。

「少し、お休みください」

薄手の毛布を大きな木の根元に敷くと、クロードがそこにじろりんと寝転ぶ。 直ぐに一頭の魔獣が傍らで丸くなつてクロードは両側に手を回して目を閉じた。

「のままレイモンドールに戻つて暮らしてもいいのだとラドビアスは思つ。 ベオーラ自治国に向かうことの方が遥かに困難で険しい。

恐ろしいとも思つ。 ベオーラに行って自分はクロードの身を守り通すことが出来るのかが確信できないのだ。

失いたくないと強く思うほどに、また前のように主人を裏切つてしまふのではないかとラドビアスは思れる。 信じられないのは、自分だった。

「クロードさま、良くお休みのところ申し訳ありませんが出発します」

「ああ、悪い」

クロードも急がなくてはならないことは承知している。 使い魔がここまでどれくらいかかったのか分らない。

クライブの、自分の命がかかっているのだ。

そして、クロードは決心していた。

おれは悪役になる。

魔導師が浮上できないほどの大災となつてレイモンドールの人々に刻み込むのだ。権力を魔導師に渡さないよつこ。語り継がれるほどの大魔になる。

何回かの休憩を挟んで進む彼らの前に海峡が現れる。青い群青。波だつていてるが以前の濃い霧も激しい波も無い穏やかな青い境界。「帰ってきたな」

「さようですね」

たつたそれだけで、何も言わない。言わなくとも分つているのだ。ここは、おれの、おれの一一番好きな所なんだ。だから。「できることをする」

この道は正しい道に続いているのか。

だが、正しい道ではなくてもおれは進んで行く。

それが自分の決めた事だから。

了

16 帰郷（後書き）

これで番外編を終ります。

読んでくださつてありがとうございました。

この続きは「レイモンドール転成の章」に続きます。

クロードの顛末は、今執筆中です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0383e/>

クロード冒険譚

2010年10月8日13時28分発行